

『Perspectives in Sociology』を経由してみる、もうひとつの<概念分析の社会学>^{エスノメソドロロジー}

—相互反映性という論点から—

岡田 光弘

はじめに

本稿は、英国の、ひいては、世界のエスノメソドロロジー研究の哲学的な基礎付けを牽引してきたマンチェスター学派の研究者による社会学の教科書である『Perspectives in Sociology』について、その記載内容の時代的な展開を辿ることで、エスノメソドロロジー研究の現在についての見取り図を得ようという試みの第二弾である。現在、本邦では、<概念分析の社会学>という運動が展開されている。だが、『Perspectives in Sociology』を経由してみると、これとは別のかたちの、マンチェスター学派を引き継いだ「概念分析の社会学」の姿が見えてくる。

以後、まずは、本邦におけるエスノメソドロロジー研究受容の概略を戯画化し、次いで、『Perspectives in Sociology』における会話分析理解などを辿ることで、エスノメソドロロジー研究の鍵概念の一つである相互反映性について、日本で隆盛した、主観主義的、懐疑論的な、そして方法的な理解とは違う、マンチェスター学派流の理解の可能性を提示する。

エスノメソドロロジー研究の日本での受容

日本に紹介された当初、エスノメソドロロジー研究は、社会学の世界を席卷していたパーソンズの構造-機能主義に対するアンチテーゼとしての現象学的な社会学の枠の中で理解されたといえるだ

ろう。エスノメソドロロジーという奇妙な名前を持つ研究が、比較的速やかに日本で受容されていく一因としては、構造-機能主義やマルクス主義といったマクロ社会学に対立する、ミクロな現象学的社会学の一派というポジションが与えられたことがあるだろう。また、エスノメソドロロジー研究は、構造-機能主義のような客観主義 vs (そうではない) 主観(主体)主義、あるいは構造-機能主義のような体制派 vs (そうではない) 反体制といった対立軸のなかで理解されたともいえるだろう。まず主流ともいべき構造-機能主義があって、エスノメソドロロジー研究が、それと対立(補完)する何物かであるだろうとして捉えられたことによる理解しやすさは、社会学会内でのエスノメソドロロジー研究の受容を容易にしたと考えられる。だが、そうした理解しやすさは、それと引き換えに、その後のエスノメソドロロジー研究の発展に大きな影を落とすことになった。

紹介の段階で、マクロ社会学の補完物としてのミクロ社会学、反体制あるいは現実変革の社会学という理解の大枠ができあがっていたということは、その裏返しとして、それ以外の新しさ、革新性を虚心坦懐に読み込む必要がそれほどなかったということである。一つの作品や一人の研究者の著作を読み込むという作業は、多くの場合、邦訳の出版として業績化されるものだろう。だが、ガーフィンケルの主著である『エスノメソドロ

ジーの諸研究』はいまだ訳出されていない。そして、彼の研究業績や主要著作の内容が体系的に紹介されることもなかった。たしかに、著者であるガーフィングルの用語や言い回しの難しさが大きな壁となっていたということはあるだろう。だが、用語、文体、そしてそこで述べられている研究方針が、とても難解だったということだけでなく、その内容が先に示した既存の対立軸の中での主観主義の枠に収まるものではなかったことも、体系的な紹介を阻んだ遠因にあるだろう。日本のエスノメソドロロジー研究の歴史において、実際に行われたのは、その研究方針を明確にするということでも研究の全体像を把握するという作業でもなかった。また、主著で述べられている研究方針は、その後、しばらくのあいだ経験的な研究を支える方針として採用されることもなかった。

まず、欧米で実際に行われていた経験的な研究のなかで、（これは仕方のないことなのだが）日本の文脈でわかりやすい社会批判的な含意の強い研究群が紹介された。この流れで、紹介の初期から現在に至るまで、社会批判的な研究を集めた、いくつかの論文集が編まれている（山田・好井 1998, 好井 2000）。すなわち、学説史を含めて、エスノメソドロロジー研究に、暗黙のうちに「日常生活そして人々の営みを何かのかたちで方向づけようとする、多様で複雑な個人を超えた〈力〉への『批判』」（好井 2006: 88）のように、構造-機能主義のような客観主義、あるいは構造-機能主義のような体制派と対立する物象化批判や社会批判といった隠された課題が背負わされていたことになる。

このように日本で行われた初期のエスノメソドロロジー研究は、パーソンズ流の「科学者としての社会学者」という客観主義の立場に反対するものではあった。だが、その対価として、社会学者に

特有の「懐疑主義」に依拠するものが多かったように思われる。普通の人々による実践を「常識」として、それを疑い、その価値を低く見て、持論を展開するという意味での中傷、すなわちアイロニーを行うものが多かった。専門的な社会学者として「当たり前を疑い」、普通の人々には「見えないものを見る」ことは、ありきたりの人々の実践を「常識」として中傷し、ないがしろにすることでもある。主観主義にも人々の実践に対して高みに立つアイロニーの要素があり、導入の初期においてエスノメソドロロジー研究と称されていた研究群においては、それが維持されていたともいえるだろう。それは、日常生活批判や常識批判というかたちで、社会学者に期待されている役割である「専門家としての懐疑主義」を維持することにもなった。これを駆動したのは、反省という意味での「相互反映性（リフレキシビティ）」であった。

しかし、ガーフィングルが構想したエスノメソドロロジー研究の肝は、反省という意味での（倫理的な）「相互反映性」（以下、「相互反映性1」と呼ぶ）とはまったく別の態度にあった。それは、社会（科）学のテクノロジーによって、普通の人々には「見えないものを見る」ことではなく、人々の実践に学ぶために「見るべきものを見落とさない」ことである。人々による日々の実践を「相互反映性」が可能にしている人々の達成として観て、その「当たり前に学ぶ」という態度だったのではないだろうか。すなわち、専門的な社会学者として、反省という意味での「相互反映性」という調査のテクノロジーを駆使して、普通の人々には「見えないものを見る」のではなく、人々の実践にある、（倫理的な）「相互反映性1」とは別の不可避の「相互反映性」を腑分けし、そこにある「見るべきものを見落とさない」こうし

た態度は、エスノメソドロロジー研究においては、「エスノメソドロロジー研究の求める無関心」と呼ばれるものである。

以下にあるように、『Perspectives in Sociology』の1979年版で会話分析について紹介する「Sacksの記述の達成」という項には「Garfinkelの『相互反映性』という概念の要旨は、実践的な行為が、一目でそれと分かる『説明可能な』現象であり、たとえば、社会的な世界を構成する行為が、それらの行為がなされた方法を通して、その社会の記述可能性を提供しているという概念である。したがって、記述（description）とは、私たちのあらゆる日常的な活動の基本的な構成要素なのである」（本書、35頁）とある。これはエスノメソドロロジー研究独自の（経験的な）「相互反映性」（以下、「相互反映性2」と呼ぶ）についての要を得た定式化である。

だが、同じ1979年版には、これとともに、「エスノメソドロロジーの研究者は、社会学者を含むメンバーが、彼らの実践的なプロジェクトを成し遂げるために用いなければならない方法を記述したいと願っているからである。社会学者たるものにとって、これらのプロジェクトに、たまたま、世界についての社会学による説明を産みだすということが含まれている」（本書、46頁）と書かれている。この意味での「相互反映性」は、「社会学の分析の道具が、日常言語に依拠している」という自己言及性のことを指す（方法論的な）「相互反映性」（以下、「相互反映性3」と呼ぶ）である。

「記述」や「説明」、さらに「定式化」というここでの用語系は、会話分析に当てはまるものである。会話分析こそが「リソースをトピックとする」学的な営みであるとされた。この営みの成果について、具体的には、定式化や成員性カテゴリー化装置として丁寧扱われている。1979年

の段階では、こうした社会（科）学の方法論に結びついた自己言及性が、「相互反映性2」として社会学にとって、不可避の「相互反映性」の代表となっているように見受けられる。

これに対して、1998年版では、同様に「相互反映性2」が「相互反映性3」と一体になりながら「実践的な社会学による理由付けは、行為の抽象化から行われるものではない。それらの行為の真っ只中で、それに必須な一部として行われる。したがって、そのような理由付けについて検討することは、ふたつの道を切り開く。それは、どのように、実践的な社会学による理由付けが、行為を組織化し、実行するかを考察するものである。またそれは、理由付けそのものが、そこに含まれている活動の組織によって形づくられる方法について考察するものである」（本書、64、65頁）のように形をかえて強調されている。そして、より重要なのは、ここでの解説が、エスノメソドロロジー研究の嚆矢であった陪審員の仕事やソフトウェアの設計といった営みを題材にして行なわれていることである。このことは、マンチェスター学派のエスノメソドロロジー研究による経験的な研究が、Garfinkelを引き継ぐプログラムとして成長し、成熟してきたことを表している。

社会学が、今まで以上に確固とした基礎を持つ学問領域になるためには、そこで使われている言語を洗練しなければならない。Sacksに結びつけても良いような、この主張に繋がるメカニズムは、自己言及性、ないし自己参入性としての（方法論的な）「相互反映性」「相互反映性3」である。会話分析は、エスノメソドロロジー研究のプログラムのなかでは、まず、言語の使用の文脈と実際の意味についての研究であることに価値を持つだろう。それは、会話のシークエンスを研究するということが、（経験的な）「相互反映性」「相互反映

性2」を扱うということだからである。だが、それに加えて、社会学との関係という点においては、同様に、(方法論的な)「相互反映性」「相互反映性3」という循環関係を指摘することで、その存在意義を示すことができそうである。Sacksや(場所の定式化で示された)Schegloffの成員性カテゴリー化についての研究もこの論点から社会的な意義を主張できるだろう。それに対して、とくに近年、エスノメソドロジー研究の重心は、会話分析とは別のやり方で、それぞれの行為の継続を可能にしている具体的な方法のことである(経験的な)「相互反映性」「相互反映性2」について、これを相互主観的、すなわち社会的な組

織化として研究するプログラムに移行しているように見える。社会制度が、日常的、習慣的な行為の継続によって成り立っているとすれば、その場に、その都度の可視性を与え、社会的、すなわち相互主観的な組織化を可能にしているのは、私たちが用いている概念とその使用法である。この点から、エスノメソドロジー研究を、個々の概念の配置を示し、具体的な使用法を実際の活動の場でのデータに基づいて解明する<概念分析の社会学>であるということが可能だろう。

では、以下でしばらくのあいだ、『Perspectives in Sociology』に眼を向けてみよう。

(1979年版, 1984年版, 一部抜粋「コミュニケーション紀要」25号54頁の続き)

会話分析：トークを介して、社会的な活動を達成するためのメンバーの方法

エスノメソドロジーによる取り組みから、これまで生み出されてきた研究のうちで、最も首尾よく研究のトピックのリソースを提供することになった研究は、故 Harvey Sacks と、彼から影響を受けた研究者たちによって産みだされてきたものである。この研究は、一般的に「会話分析」と呼ばれており、社会的な行為の性質に関するエスノメソドロジー研究による概念化をもちいた、主要な種類の調査研究となっている。

Harvey Sacks：記述の達成

Sacks のトークの社会的な組織に関する最も初期の研究は、記述という現象に関するものである。メンバーは、その人たちのトークにおいて、絶えず、お互いに、自分たちの社会的な世界を記述している。彼らは、自分たちが見た出来事、自分たちがしたことや、自分たちの気持ちや、起こったことに対する彼らの態度、「次には何をなされるべきか」または「そのとき、自分たちは何をすべきだったのか」などを記述する可能性がある。私たちは、日常生活において、浴びるほどの記述にさらされている。それは、対面しての相互行為からだけではない。テレビや新聞や本などからも浴びている。社会生活が、記述する能力そのものから構成されていると考えても、それほど誤解を招く恐れはないであろう。Garfinkel の「相互反映性」という概念の要旨は、実践的な行為が、一目でそれと分かる「説明可能な」現象であり、たとえば、社会的な世界を構成する行為が、それらの行為がなされた方法を通して、その社会の記

述可能性を提供しているという概念である。したがって、記述とは、私たちのあらゆる日常的な活動の基本的な構成要素なのである。

Sacks は「子供たちのする物語の分析可能性について」という研究で、記述されている出来事を産みだすことが可能な記述を産みだすメンバーの方法を記述しようと試みている。彼は、三歳児によって語られたストーリーの断片を分析している。その断片とは、「The baby cried. The mommy picked it up./ その赤ちゃんは泣きました。そして、お母さんは、その子を抱き上げました」というものである。

Sacks は、ふたつの文に関する6つの最初の観察をすることから始めている。第1として、彼がこのふたつの文に関する聞きとりで観察しているのは、彼が即座に聞いたのは「お母さん」とは「赤ちゃん」の母親だということである。2番目の文が、たとえば、「Its mommy picked it up./ その子のお母さんは、その子を抱き上げました」とは言っていないという事実にも関わらず、彼はこのように聞いた。第2として、大部分のネイティブのアメリカ人が、この文を、彼と同じ意味で聞くであろうと、自信を持って予測することができると感じている。ここでの論点は、これが、当該の文における「お母さん」を理解できる唯一の方法ではないということである。明らかなことだが、もしこれに代わる他の可能性を考え始めたとすれば、そのとき「mommy/お母さん」は、数え切れないほど異なる種類のものに言及している可能性がある。たとえば、得体の知れないエジプトのミイラが、幼い子供たちを誘拐するのかもしれない。もし、何らかの理由で、私たちが「自然な」聞きとりを疑問視するように仕向けられたら、そのような別の聞きとりの仕方が、私たちが思いつくものとして可能である。Sacks が提唱している

のは、「お母さん」を、その赤ちゃんの母親として聞きとることが、私たちの文化のメンバーには、これらの文に対する「自然な」最初の聞きとりであるということである。文章が、それ自体について語っておらず、他の聞きとりの可能性に関するわずかな考えも与えられない限りにおいて、そのとき、この最初の聞きとりは、明らかに文化的な達成なのである。Sacks のこの論文の目的は、私たちの社会のメンバーが身につけている文化的な方法が、彼らにそのような聞きとりを可能にして、それを自発的で、完全に同じようなものとするを可能にし、その発話を世界における出来事のありうる記述として聞きとりすることを可能にしているということである。

Sacks による 3 番目の観察は、メンバーが、自分自身を含めて、母親が赤ちゃんを抱き上げたのは、赤ちゃんが泣いた後であり、前ではないと聞いていることである。私たちがこれらのふたつの文章に対して持っているより秩序だった用語で言葉にすれば、私たちは、それを S1 と S2 と呼ぶことができる。それらのそれぞれは、ある出来事を報告しており、S1 は、赤ちゃんが泣いたということで、S2 は、母親が赤ちゃんを抱き上げたということである。私たちは、2 番目の出来事は、1 番目の出来事のあとに起こったことと聞く。なぜなら、2 番目の文章には、最初の文章のあとで起こることが含まれているからである。

4 番目として、Sacks が提唱しているのは、メンバーもまた、2 番目の出来事が最初の出来事よりあとに起こったものとして聞くのではなく、2 番目の出来事が起こった理由とは 1 番目のため、たとえば、母親が赤ちゃんを抱き上げるのは、赤ちゃんが泣いたからだと聞くということである。これらのふたつの観察が関連しているのは、もし文章の順番—そして、出来事の順番もまた、

反対の順番だとすれば、メンバーが「赤ちゃんが泣いた」ことを「母親が赤ちゃんを抱き上げる」理由として聞きそうもないという点である。Sacks が提唱しているのは、メンバーが、どちらも、出来事を報告するふたつの連続的な文章を聞いたときには、(a) もしとくに、対照的な事態（たとえば、「赤ちゃんが泣いた。その前に、母親が抱き上げたにも関わらず」）を示唆する情報がなくて、しかも (b) 出来事の順番がそのような物事が起こるに適切な順番を構成しているものと見ることができるなら、メンバーは、出来事を文章の順番どおりに起こったものとして聞くだろうと思われる。たとえば、このケースでは、2 番目の出来事は、最初の出来事を条件としていると聞かれうることである。

Sack がした 5 番目の観察は、これらの理解のすべてが、いかなるメンバーによってもなされるものであり、文章そのものによって提供される以上に、母親と赤ちゃんに関するさらに多くを知ることが必要としないということである。私たちは、どの特定の赤ちゃんや、どの特定の母親がトークの対象になっているのかと知ることもなく、彼らに関する「文脈上の」いかなる情報を知ることもなく、これらのかなり複雑な聞きとりのすべてを行うことができる。私たちが、これらの聞きとりにするために利用するものとしての、そのような「文脈上の」情報は、文章そのものの中に含まれている。

6 番目で、最後のものは、先行する 5 つの観察すべてに由来するもので、メンバーが苦勞することなく、これらのふたつの文章を社会的な出来事を「産みだすことのできる記述」として認識できるということである。事実として、メンバーが別な考え方をする、何らかの特別な理由がない限り、彼らが、これらのふたつの文章を、社会的な

出来事の「適切な」記述と見なす可能性が極めて高いのである。さらに、Sacksに言わせれば、メンバーは、それらが真正な記述であるかどうか確かめるために、自分自身で個人的にそれらの文章が言及している出来事を調査する必要なしに、この判断を下すことができる。むしろ、この判断が下せるのは、その文章そのものが「記述らしく聞こえる」からである。反対に、メンバーは、他の文章が、異なる方法で構築されていて「記述らしく聞こえない」と、この場合もやはり、チェックすることもなく、しかも、文章を何らかの実際の出来事を背景に、それらが、実際にそれらの出来事の記述であるかどうか確認するためにチェックすることもなく、判断するかもしれない。

Sacksの分析で用いられている基本的な概念は、「アイデンティティー」とか「カテゴリー」といったものである。いかなる人物にとっても、彼を「正しく」記述するための膨大な数のカテゴリーが存在する。たとえば、読者たちは、「学生」であり「少女」であり「娘」であり「運転手」であり「黒い髪」であり、「ポップ・ファン」であり、「ティーンエージャー」であり、「社会学者」などである。このように、分析のためのひとつの問題は、メンバーが、どのようにして、方法論的に、特定の機会に対する適切なカテゴリーを選ぶかということである。ここで、カテゴリーを選ぶ際に、私たちが注目すべきことは、私たちは、同時に（そして相互反映的に）社会的な機会の性格を構成しているということである。

2番目の基本的な概念は、Membership Categorisation Device (M.C.D./ 成員性カテゴリー化装置) である。Sacksの提唱するところでは、メンバーは、方法を用いて、関連するカテゴリーのグループやクラスターから単一のカテゴリー（またはアイデンティティー）を選ぶ。そのような一

群が、M.C.D.なのである。このように、M.C.D.とは、「相伴う」カテゴリーの集合である。最初は、特定の装置からあるカテゴリーを、適切にある人物に適用するという意味で、それは、彼らを同じ装置の何らかの異なるカテゴリーと同一視することから排除すると聞くことができる。したがって、単一の装置の中のカテゴリーは、まず、相互的に排除的な選択肢として聞こえる。最も簡単な実例は、「男性」、「女性」というカテゴリーであり、それは「性別」という成員性カテゴリー化装置を構成するものと見ることができる。メンバーにとって、「男性」として認められる人物が、「女性」ではないことを聞くことは、カテゴリーの使いかたとして「自然な」ことである。メンバーが知っているのは、これらのふたつのカテゴリーが、性別によるカテゴリー化が可能であることを余すところなく述べているということである。したがって、ある人物が「男性」でないとしたら、その人物は「女性」に違いないものと聞く。これは「自然な」ことでもある。M.C.D.という概念によって、Sacksは、成員性カテゴリーの、メンバーが当たり前に行っている常識のリソースへと組織するのを記述しようと試みている。メンバーとして、私たちは、一般に用いられるカテゴリーが、どの集合に属しているかを知っている。たとえば、私たちは、みな、どのようなカテゴリーが「職業」という集合や「家族」とか「道路の利用者」とか「人生の諸段階」とか「国籍」といった集合に属しているかを知っているのである。逆に言えば、私たちは、みな、「建築家」や「父親」、「歩行者」、「若者」、「イングランド人」などの人物のカテゴリーが、どのような種類の集合に属しているかを知っている。カテゴリーのこのような組織化は、人々の成員性についてのカテゴリー化が「首尾一貫している」か「矛盾している」のかを

聞くことができる基礎をメンバーに供給している。すなわち、M.C.D.は、ある人物が、特定のカテゴリーを使うことによって、身分を明らかにされてきたとき、それに基づいて、他の人々に、適切に他のカテゴリーが選ばれる基礎を提供している。さらに、M.C.D.は、人々の身分証明に対する重要で適切に関連している文脈上の詳細化をすることを可能にするための基本を提供する。この点で、Sacksは、「カテゴリーと結びついた活動」という概念を導入する。この概念によって、彼が言及している事実とは、多くの種類の活動が、常識によって、特定の成員性のカテゴリーに「結びつけられて」いるということである。たとえば、誰かが逮捕されたと聞くとすれば、私たちは、それが警察によって行われた行為だと聞き、もし、誰かが、夫として小言を言われたことをぼやいていることを確認すれば、私たちは、その小言がその妻によって言われたものだと聞く。

Sacksが提唱しているのは、メンバーが、M.C.D.を、その人たちに適用可能なありうる規則に対する方向づけを含むものとして、方法的に使うということである。そのような規則のひとつが、下記で記述する「一貫性規則」である。

もし、人々のある集団がカテゴリー化されて、その最初の集団のメンバーをカテゴリー化するために、あるM.C.D./成員性カテゴリー化装置の集合から、あるカテゴリーが使われてきたとすれば、そのとき、同じ集合のそのカテゴリーや、他のカテゴリーが、その集団のさらなるメンバーをカテゴリー化するために、用いられる可能性がある(Sacks 1974: 219)

Sacksが分析しているその断片では、「赤ちゃん」というカテゴリーが用いられている。「赤ちゃん

ん」は、いくつかのM.C.D.から由来しうるカテゴリーである。それというのも、それは、非常に幼い幼児に言及するものであり、両性間で、愛情の表示の用語となりうるものである。また、それは、誰かしら、ある家族の最も幼いメンバーや、ある集団の最も新しいメンバーに言及するものでありうる。もし私たちが、この特定のトークの断片での「赤ちゃん」という言葉を、Sacksが提唱したような方法で聞くとすれば、そのとき、このような聞きとりの達成に貢献しているのは、私たちの側での、一貫性の規則に対する方向づけであることは明らかである。私たち全員がするものとしてSacksが提唱している聞きとりに適切に関連している「赤ちゃん」に関しては、ふたつの意味がある。ひとつ目は、M.C.D.の「人生の諸段階」に由来するカテゴリーである。このM.C.D.の「人生の諸段階」は、さまざまな人生の諸段階に関するアイデンティティーから構成されるカテゴリーの集合であり、そのため、いかなる単一のカテゴリー（たとえば、「子供」、「若者」、「大人」など）は、お互いの関係による意味から由来する。「赤ちゃん」とは、また、M.C.D.の「家族」のカテゴリーでもある。したがって、その意味は、「家族」という集合（「母親」、「父親」など）の他のメンバーとの関係による意味に由来する。この断片において、私たちは、「赤ちゃん」というカテゴリーを両方のM.C.D.との関係において、聞いている。この方法的なやり方で、私たちは、両方の意味を結びつけ、たとえば、私たちは、「赤ちゃん」を、「お母さん」の子供である「非常に幼い幼児」として聞くのである。そして、私たちが「赤ちゃん」という言葉をこの結びつけられた意味で聞くのは、それがトークの特定の文脈に埋め込まれているからである。トークのこの文脈の特徴が、「赤ちゃん」という言葉に対するこの即座の

問題のない聞きとりを提供し、私たちが、メンバーとして持っている「意味をとる」機構を与えられている。

第一に、それなら、その「赤ちゃん」と、その「お母さん」が同じ家族のメンバーとして聞かれ、たとえば、その赤ちゃんがこの特定の母親の赤ちゃんであり、その他の人の赤ちゃんではないと聞かれるのは、どのようにしてなのだろうか。Sacks が提唱しているのは、このような聞きとりは、「家族」という M.C.D. の構造に由来するということである。「家族」というカテゴリーの集合は、「チーム」であるという構造をもっており、あるいは Sacks の用語では、それらは「duplicatively organized/2重に組織されている」ものである。これが意味することは、集合におけるカテゴリーのセットが、同一視することのできる「社会的なユニット」を形成しているということである。結果として、そのようなユニットの中には、(特定の)カテゴリーの適切な数の該当者(たとえば占有者)がいることになる。言葉を換えれば、家族とは、「チーム」と見なすことができ、それは、最小のメンバーとして、ひとりの父親とひとりの母親のひとりの子供をメンバーとするものである(そして、もちろん、父親と母親というカテゴリーでは、それぞれのユニットについて、ひとりが最大で適切な数であるが、それに対して、子供というカテゴリーについては、これは当てはまらない)。この構造は、ある種のスポーツのチーム(たとえば、フットボール・チームにおけるゴールキーパー、フルバック、ストライカーなど)のような、何らかの他のカテゴリーと共通している。

Sacks が提唱しているのは、この「チームのような」(集合とその要素が「2重に組織されている」)構造を持つ M.C.D. には、私たちの社会のメ

ンバーの頭にある「聞きとりの規則」があるということである。この規則とは、話し手が、複数の人々を特定するために、2重に組織されている集合からのカテゴリーを使う場合には、聞き手は、これらが同じ社会的なユニットのメンバーであると聞くことができ、ひいては、聞き手は、そのように聞くべきだということである(もちろん、除外する場合がある。それは、何らかのひとつのカテゴリーに特定される人々が、ひとつのユニット内のそのカテゴリーに対する最大の適切な数を超えている場合、たとえば、ひとつのフットボール・チームに2人のゴールキーパーがいる場合などである。この過剰が聞かれる場合には、話し手たちは、実際には、しばしばカテゴリー化を何らかの方法で特徴づけて、たとえば「相手方のゴールキーパーもいくつかすごい守りをした」というように、特定される人物が同じユニットのメンバーではないことを示すのである。このように、話し手はさらに、Sacks が提唱した聞きとりの規則に対する彼の指向をはっきり示している)。

この聞きとりの規則こそが、私たちがどのようにして、その「お母さん」とは、その「赤ちゃん」のお母さんである聞き、このように、「赤ちゃん」がその家族であると聞くか、を提供しているのである。「赤ちゃん」に関するこのような聞きとりを作り上げるための文脈上の特徴は、「お母さん」というカテゴリー化であり、逆に言えば、「お母さん」に関する聞きとりがなされる文脈上の特徴は、「赤ちゃん」というカテゴリー化なのである。したがって、ふたつのカテゴリーは、「互いに相手を構成する」ものであり、すなわち、私たちは、お互いに対する自分たちの理解を相手による使い方から同時に引き出す。

同様に Sacks が提唱しているのは、別の意味で「人生の諸段階」というカテゴリーで「赤ちゃ

ん」が使われる場合の私たちの聞きとりは、「泣いた」という行為の記述語に結び付けられているということである。私たちが述べたように、Sacksが主張しているのは、特定の行為は、「カテゴリーと結びついた」ものであり、すなわち、メンバーによってとられる行為は、特定のカテゴリーの人物によって「適切に」または「普通に実行される」。このように「買うこと」は、何かしら「顧客」によってなされるものであり、「助ける」ことは、(少なくとも)「友人」や「親戚」によって、なされるものである。活動と成員性を示すカテゴリーのあいだのこれらの関係は、メンバーによって、あらゆる方法で利用されている。たとえば、ある人物が実行している行為を特定することは、メンバーに、その人物が、たとえば、誰かを「逮捕」しているに違いないという、何らかの社会的なアイデンティティーを提供しうるのである。逆に言えば、ある人物に関する社会的なアイデンティティーについての知識によって、たとえば「警察官」の場合には、その人たちがどのようなことをするかという識別を提供しうる。また、これらの関係は、人々に対する倫理的な評価の基礎を形成するものである。そこでは、その人たちは、その種類の誰かとして、適切でない行為を実行しているものと見られたり、彼らが実行すべき行為を実行していないと見られたりする(たとえば、「子供っぽい振る舞いをする」とか、「年齢の割に成熟している」とか、「親としての監督を行使していない」など)。

Sacksが提唱しているのは、「泣くこと」は、カテゴリーに結びついた行為と見ることができ、それは(少なくとも)「赤ちゃん」というカテゴリーに結び付けられているということである。彼の言うところでは、私たちは、「泣く」という行為が、「若者」とか「大人」などの人生の諸段階

という集合の他のカテゴリーに関連していることを考慮することによって、この見解の正しさを判断することができる。人生の諸段階という集合は、人間がそのカテゴリーを連続的に通過し、すなわち、最初は「赤ちゃん」で、次は「子供」で、その次は「若者」、そして「大人」になるという点で、階層的な種類の築造をしている。これらのカテゴリーのそれぞれに結びついているさまざまな行為があるように、そして、メンバーが一般的に、これらのカテゴリーの通過を「発達」として見なしているように、さらに「下の」地位のカテゴリーに関係する行為を実行する人物よりも、さらに「上の」地位のカテゴリーに関係する行為を実行する人物に関するさまざまな判断を、メンバーがする可能性が起こってくる。言い換えれば、「より低い」カテゴリーに関係する行為をする人々が否定的な判断を受ける一方で、「より高い」カテゴリーに関係する行為をする人々は、プラスの倫理的な判断を受ける傾向がある。このように、誰かにとって、「子供」とか「年上の男の子のように振る舞う」とか非常に「大人らしい」と認められることは、賞賛の一形態として意図されているが、これに対して、誰かにとって、「大人」とか「赤ちゃんのように行動する」とか「子供っぽい」と認められることは、非難の一形態なのである。

もし、この分析が正しいとしたら、それは、このデータにおいて、私たちが「赤ちゃん」を、人生のある段階として、どのように聞くかを提供してくれる。またしても、そのふたつの文脈上の特徴(または「文脈依存的な特別なもの」)、すなわち、人のカテゴリーである「赤ちゃん」と、行為の記述語の「泣いた」は、私たちが「赤ちゃん」という言葉をこのような意味で聞くのは、「泣いた」ためであり、他方、私たちが「泣いた」とい

う言葉を、現に私たちがしているように聞くのは、(たとえば、「叫んだ」の類義語よりもむしろ)、「赤ちゃん」の存在のせいであるという点で、相互に構成要素となりあっているものである。

結局、私たちは、「赤ちゃん」を、「お母さん」の子供である非常に幼い幼児に言及するものとして聞く。だが、それは、文脈上の特徴に関する私たちの分析によって、私たちに、常識的な知識という観点から、「赤ちゃん」のふたつの意味が結び付けられることが示されるからである。私たちにとっては、「家族」と「人生の諸段階」という両方の意味で、ある人が「赤ちゃん」でありうることは、問題になるような事柄ではない。私たちは、そのような結びつきは、私たちの社会のお決まりの特徴であることを知っているのである。それに反して、「家族」の「父親」であることと、その「宗教的な」意味の結びつきは、ある種の状況では、奇妙で、さらなる説明を必要とするように思われる。

私たちは、Sacksの論文について、相当詳しく要点を述べてきた。それは、エスノメソドロジー研究者が、メンバーが意味の組み立てる、すなわち、意味をとる手続きとして記述することを提唱してきた文化的な「仕組み(machinery)」がどのような種類のものなのかを具体的に示すためである。この「仕組み」によって、メンバーが、どのように完璧に社会的な世界の普通でありふれた理解をすることができるのかを、分析者が記述することが可能になっている。メンバーは、彼らがどのようにこれらのことを彼らがしているかについて、じっくりと考えることなどしないように思われる。彼らは、その方法と、含まれる能力を当たり前のことと見なしている。一部の人が、文脈依存的な特別なものの何らかの組み合わせに対して「正しい」理解を達成することに失敗する状況

においてさえ、メンバーは、これらの理解を作り上げることに含まれている方法や能力に対して、疑問を抱くようになったり、検討しようとしたりはしないものである。むしろ、彼らは、「いかなる人にとっても」見たり聞いたりできるものとしてそこにあるものを、人々が見たり聞いたりすることに「失敗」した理由を探すものである。

Emmanuel Schegloff：場所の記述

Schegloffは「会話の実践に関する覚書：場所の定式化」という論文で、Sacksを同僚として、トークにおいて、どのように場所が適切に特定されるのかという問題に取り組んでいる。この研究の問題に彼自身が表現を与えて定式化したのは、以下のようなものである。

位置に表現を与えて定式化するという「問題」は、このようなことである。すなわち、言及されているいかなる場所に対しても、対応するテストにより、それぞれの場所に対して、正しく言及する用語のセットがある。とはいえ、いかなる実際の使用の機会についても、そのセットに対するいかなるメンバーも「正しい」わけではない。そのセットから特定の用語が特定の機会に使われ、他の用語が拒絶されるのは、どのような仕組みでそうなるのであろうか(Schegloff in Sundow (ed.) p.81)。

たとえば、私たちが住んでいるところについては、「家庭」とか、「チェスターフィールド」、「フェアビュー通り17番地」とか、「新しい住宅街」とか、「ダービーシャー」とか「北イングランド」とか、ある状況で、正しい記述として、他にも多くの方法で聞くことができる。Schegloffが提唱しているのは、これらの他に取得可能な記述が、関係する場所が会話の中で言及される際に、そこか

ら選択がなされる集合を成しているということである。特定の記述の選択は、恣意的になされるものではない。なぜなら、その集合のいかなる項目についても、それが、問題になっている場所を特定するための適切な方法とは聞かれない状況を、私たちは容易に想像できるからである。このように、もし私たちが、「あなたはどこに住んでいますか」と訊かれたら、その場合、質問は私たちの住所を尋ねているものと聞かれるべきであり、「家庭に」とか「イングランドに」と返答することは、「巧妙である」かあるいは「故意に妨害している」ものとして聞かれる可能性がある（たとえば、警察官は、不適切な返答の可能性を最小限にするために、「どこに住んでいますか」ではなく「あなたの住所はどこですか」と訊くように訓練されている）。Schegloffは、おそらくは、正しい集合からの記述の選択を「定式化」と呼んでいる。彼は、「集合」という概念が、何らかの限定された用語のリストを暗示することを意味しているわけではないことを強調している。彼の分析の目的は、他の文脈では、どのような他の記述が使われるかを解明しようとするものではない。むしろ、それは、メンバーが、適切な場所の記述を選ぶさいに使う方法を記述するものである。Schegloffが提唱しているのは、メンバーの「場所を定式化する」方法が、3種類の分析の観点から記述することができるということである。

1. 「場所の分析」は、アメリカの中西部の都市の警察への電話のデータで例証されている。通話者は、助けを求め、彼女の住所を訊かれる。彼女は、通りと家の番地を答え、(「シエラドライブの121番です」)、これが市内の住所として、警察官によって聞かれる。とはいえ、警察官には、市の地図の住所を見つけることができない。通話者

は、道順の案内をするように求められ、彼女は、これもまた地図に載っていない他の通りの名前を挙げて返答する。かなりの努力と、欲求不満のあとで、通話者がその都市にはすんでいないことが確認される。

そのデータが示しているのは、話の相手に対して、共存の問題について、メンバーが自分自身の側で実行する場所の分析の重要な次元である。何らかの理由で、何らかの場所に関する当事者たちの共存に基づいて、メンバーは、定式化を選んだり、選ばざるをえなかったりする。他の目的のためには、定式化は、共存する当事者がいないことに基づいて、選択されるべきなのである。いずれのケースにせよ、共存は、地理的な問題ではなく、社会的な問題なのである。すなわち、メンバーは、他者の(かつ/あるいは言及された対象の)の所在地を、その所在地が、現在の問題に対して持っている関係から、どのように適切に定式化されるかという見地から、分析することを求められる。

2. 「成員性についての分析」とは、メンバーによって、その場所に表現を与えて定式化するために用いられる、もうひとつの方法である。それは、話者が、自分自身と会話の相手に作り上げる成員性カテゴリー化に焦点を当てるものである。メンバーは、常識から、相互行為的な状況で、お互いのアイデンティティーをどのように理解しているかとの関係で、場所の定式化が決められるかを知っているのである。たとえば、誰かが道順を尋ねて、その人が「よそ者」だと確認したら、その人に「地元民」しか理解できないような指図をしても無駄である。

Schegloffは、さらに進んで、地理的な場所の特定で、彼が「G定式化」(たとえば、通りの住所)と呼んでいるものと、あるメンバーやメンバーの

関係の観点から場所を特定する方法で、彼が「Rm 定式化」（たとえば「ジョンのところ」とか「ドクター・ブラウンのオフィス」）と呼んでいるものを区別している。彼が言っているのは、メンバーには、何らかの特定の場所に対して、GとRmの用語を選ぶ際に優先される規則があるということである。そして、その規則とは、もし可能ならRm定式化を使うということである。この規則を適用して、適切なRmの用語を選ぶためには、私たちは、会話の相手との成員性の分析をすることを要求される。この分析に含まれている発見とは、もし彼が、「友人対友人」とか「知り合い対知り合い」などといったペアの関係性を満たしていれば、話題になっている場所が特定できるという観点から何らかの第三者がかかわる場合もあるということである。

3. 場所を定式化するために、メンバーによって使われる3番目の方法とは、「トピックまたは行為の分析」である。「トピック」とは、それがどのようなものであれ、メンバーが、何らかの会話の焦点として認識するものである。それは、彼らが、会話の後の報告で「どのようなことが話されたか」として定式化するようなことである。メンバーは、トークの中で、自分たちが使う人々や対象や出来事を定式化することを通して、認識可能なトピックを産みだす。すなわち、ある種、一貫した焦点のあるものとして聞くことができる「整合する」定式化の共同選択を通して、トピックが産出される。メンバーは、自分たちのトークが、先行するトークを「次に結びついたり」「整合したり」するように聞かれるように、彼らは場所の定式化を選ぶ方法で、トピックへの気遣いを示す。

Schegloffは、ある女性が「Shepherds」百貨店

の外で目撃した出来事に関して、他の女性に語っている電話の一節との関係から、この問題を検討している。彼が指摘しているのは、場所が、その人たちの「Shepherds」との関係という観点から表現を与えられ定式化される方法で、どのようにトピックとしての一貫性が構成されるかということである。たとえば、2台の警察の車が「向かいに」駐車していて、舗装道路の一部には、何人かの人々が立っていて、「従業員たちが出てきたところ」と確認されることなどである。

要約すると、Schegloffの論文は、トークの中の場所の用語の使い方が、どのように、社会的な相互行為の協調的で自然な性質を表しているかを例証しようと試みている。彼は、メンバー、すなわち、話者と聞き手の両方が、どのように、トークの「文脈依存性を修復する」といった種類の分析を採用しているかを示している。Schegloffは、メンバーが、その人たちが産みだすトークで、ある機会の詳細に自分たちが気づいていることを表す多くのさまざまな方法のいくつかを例証している。それというのも、エスノメソドロジーの研究者は、その研究の中心的なトピックを、メンバーがこれらの詳細を説明したり、対処したりできるようになるためのリソースの組織された性格として見ているからである。

Schegloff：会話のシークエンシャルな組織化

アイデンティティーに対する焦点は、会話分析という領域の研究のひとつの重要な側面である。もうひとつの重要な側面とは、会話の組織化と構造について検討することである。私たちは、この後者の側面をSchegloffの「会話の始まりのシークエンス」をもちいて例証する。

Schegloff は、この論文で、日常生活の秩序だった、方法的な性格へのエスノメソドロジカルな関心を維持している。それは、「2人の当事者たちによって会話のターンが上手に扱われる秩序だったシークエンスへの協調された参加の方法」について検討することである。彼のデータは、アメリカの警察所への電話と警察署からの電話の通話の、ほぼ500本の会話の最初の5秒間で構成されている。彼が見出したのは、通話の当事者達のあいだのトークのターンの割り当てを「配分の規則」によって記述することができるということである。それは単純に、「答える側が最初に話す」と記述されるものである。補助的な規則とは、「電話をかけた側が、最初のトピックを提供する」ということである。

とはいえ、彼は、通話をした側が最初に発言するという「逸脱」したケースも見いだしている。彼は、逸脱したケースをこの規則の例外として扱う代わりに、ケースのすべてを含めることができるより一般的な規則を確認しようと試みている。彼が主張しているのは、彼が、日常生活の「あらを探そう」と試みているわけでもなく、日常生活を分析者により好都合な形に押し込めようとしているわけでもないということである。むしろ、彼は、それを「あるがままに」記述しようとしている。彼は、「適合」しないデータも排除することを回避するに十分な一般的な説明的な規則を産みだしたいと願った。このように、Schegloff は、彼の分析を再考察して、提唱しているのが、答える側の最初の発話、すなわち、電話でのターンは、「呼び出し—応えのシークエンス」の「応え」として見ることができるということである。この「呼び出し」は、電話が鳴り響くことで提供される。これらのS-A (summon-answer/呼び出し—応え) というシークエンスは、日常生活で、ごく普通に

使われているものである。電話は、その一種類にすぎない。それらは、「最初のもの」から構成されており、それは、「装置に注意を向けること」、たとえば、電話のベルであり、誰かの名前を叫ぶことであり、小槌を叩くことである。受け手のほうは、「2番目」として、何らかの適切なやり方で「応える」。

S-Aのシークエンスには、いくつかの形式の定まった属性がある。まずひとつ目として、それらは「終結しない」。すなわち、何かしらが、それらに続くべきものであり、それらは、相互行為的にそれ自身として完結するものではない。ふたつ目として、それらは「条件下で適切に関連する」ものであり、たとえば、S-Aのシークエンスに続く相互行為は、S-Aのシークエンスの完結に依存し、または、それに左右される。Schegloffは、これらの属性を、もし人々が呼び出しの挨拶を間違えたときに、人々が実際にどのように('I was only saying hello...')謝罪するか、もし呼び出しに回答がなされなかった場合に、それが繰り返され、ひとたび回答が得られたら、それは繰り返されず、代りに、何かしら別のことが起こるに違いないことを示すことによって、具体的に示している。このような方法で、彼は、S-Aのシークエンスのふたつのパートが、「トークのユニット」を形成するものとして、意味深く語るができる。それというのも、「最初のもの」が与えられたら「2番目のもの」が期待されるからである。もし「2番目のもの」が手助けしてくれないとしたら、それは「公式に」欠けているということであり、たとえば、それは相互行為上、意味深い形で欠如しているのである。このように、その欠如から、私たちは、メンバーとして、答えるはずの人物に対して、強力な推論をすることができ、たとえばその人物は、呼び出した人物を「無

視して」いるか、あるいは彼が「不在」か「手が離せない」などと推論する。

したがって、Schegloffは、彼の「逸脱」のケースを、以下のような行為のシークエンスを提示することによって説明している。(1)呼び出し(電話が鳴る)、(2)応えなし(受け手が何も言わない)、(3)別の呼び出し(電話のかけ手が、「hello」と言う)、(4)応え(受け手が応えて、「hello」という)。彼の他のケースすべてでは、応えは、スロット(2)によって、受け取られている。

彼は、S-A シークエンスが会話の相互行為を産み出す強力な方法だと提唱することによって、結論づけている。呼び出しを受けた側は、強いて応えなければならないと感じる。(私たちが、心に留めておかななくてはならないこととして、北アイルランドでは、依然として、人々がドアへのノックに反応して、銃で撃たれることがあるという—そのようなことが起こるかもしれないという彼らの知識にもかかわらずそうなのである)。さらに、受け手は、通常、質問によって答える。この質問がさらなる相互行為を産み出し、呼び出した側が、議論のための最初のトピックを提供することを可能にする。その応えは、応える人物に、トークの利用可能性を提供する。それというのも、Schegloffが特筆しているように、たんなる当事者たちの共存では、相互行為を構成しないからである。すなわち、彼らは、彼らの相互行為への参加を協調する何らかの手段を持たなければならない。S-Aのシークエンスは、そこに組み込まれたさらなる行為の含蓄を持つと同時に、そのような手段も提供する。

結論：批判的な反響

この章では、私たちは、社会学的な取り組みとしてエスノメソドロジーについて記述してきた。

とはいえ、私たちが強調するのは、そのような種類の社会学的な研究は、堅く結集し、統一されたかたまりを形成するものとして記述されるわけではないということである。それにもかかわらず、私たちが検討してきた研究は、根本的で独特な共通の特徴を持っている。すなわち、研究の中心的なトピックとしての日常生活における常識による理由付けの性質と構造に対する焦点である。いかなる社会学的な取り組みに対しても、その批判者たちがいる。だが、エスノメソドロジーは、他のいかなる研究よりも、さらに多くの反対意見をぶつけられている。したがって、私たちは、エスノメソドロジーに対する最もありふれた、根本的な批判を簡潔に、見直すことにする。

最初に、他の社会学的な取り組みで産出された研究のトピックと比べて、エスノメソドロジーは、微細な社会的なプロセスの研究に過ぎず、通常は、「些細な」事柄に関する考慮で終わっているというものである。エスノメソドロジーの研究者は、そのような批判が「視点の偏り」を反映するものとして、返答する。さらに、「権力」や「社会化」、「階層化」といった現象は、エスノメソドロジーの研究者による議論では、日常的な相互行為の状況の中で、それを通して産みだされるものである。これらの現象は、社会のメンバーが実際に、対面して行っている相互行為と独立したものとして、「外部に」存在するわけではない。したがって、エスノメソドロジーの研究者は、メンバーが、そのような現象を表す状況をどのように達成するかを記述することに関心を持っている。

ふたつ目として、反対に、エスノメソドロジーの研究者は、「伝統的な」社会と、その方法や技法に対して批判的だが、一方では、それを改善するような、有効な提案をすることができないであると見られている。エスノメソドロジーの研究者

は、これらの批判者たちが、自分たちがしていることの核心を見落としていると答える。それというのも、エスノメソドロロジーの研究者は、社会学者を含むメンバーが、彼らの実践的なプロジェクトを成し遂げるために用いなければならない方法を記述したいと願っているからである。社会学者たるものにとっては、これらのプロジェクトに、たまたま、世界についての社会学による説明を産み出すということが含まれている。

3つ目として、より根本的な批判は、エスノメソドロロジーの研究者が、メンバーの方法を研究するための手段についてのものである。自分たち自身の議論で、自分たちも、同時に同じ方法を採用しているという批判である。エスノメソドロロジーの研究者は、いかなる経験的な場に対しても、一般化された方法論的な指令をものさしとすることには危険があると返答する。その代わりとして、自分たちの研究が、実際の経験的な調査研究の詳細な議論をもとに判断されることを求める。

最後に、批判者たちが指摘するのは、エスノメソドロロジーそのものが、組織化された社会的な活動であり、進行中の実際的な達成だということである。それゆえ、『メンバーがエスノメソドロロジーを行っていること』に対する『エスノメソドロロジーの無関心』という態度をとることが可能である。しかも、このように『メンバーがエスノメソドロロジーを行っていること』に対する『エスノメソドロロジーの無関心』という態度をとることが可能であるとしたら、『エスノメソドロロジーの無関心』という態度をとることとは…あそこには、

底の知れない深い穴が存在している」(Giddens, p.41) という。

ここでは、Giddens は、「ラディカルな相互反映性」に関する問題を提起している。たとえば、研究に対する研究に対する研究…などということになる。エスノメソドロロジー研究者は、この際限のない逆行が、もちろん、論理的な可能性であると返答することになる。とはいえ、エスノメソドロロジーの研究者が指摘するのは、この問題は、日常的な世界を分析することに関心を持つ社会学者たちにとってより、むしろ哲学者にとっての問題だということである。エスノメソドロロジーの研究者は、メンバーが、どのように彼らの日常生活を達成していると見ることができるかを記述することに関心を持っている。世界とは、彼らも、他のいかなる人たちにとっても、認識可能なものである。もちろん、彼らは、エスノメソドロロジーの研究に対して、エスノメソドロロジーの研究をすることが可能である。さらにエスノメソドロロジーの研究に対する、エスノメソドロロジーの研究に対して、エスノメソドロロジーの研究をするなどということが可能であることを受け入れている。エスノメソドロロジーの研究者は、たんに、この連鎖に沿って、限りなく続けることに特別な関心を持たないことを指摘するだけである。さらに、この連鎖に沿ったいかなる地点でも、何らかの説明を産み出すことは、それがメンバーによる実践的な理由付けという常識的な方法によって達成されることを必要とする。エスノメソドロロジーの研究者の関心は、この方法にある。

1990年版（一部抜粋「コミュニケーション紀要」25号66頁の続き）

会話分析：トークを通して社会的な行為を達成するためのメンバーの方法

私たちは、前の箇所では、Garfinkelが、社会生活の理論や説明というより、むしろ経験的な研究のプログラムとしてエスノメソドロジーを作り出したことを強調した。そのように作りだされたため、その力の適切な試金石は、それが可能にしてくれる研究にある。もし、社会生活が、Garfinkelが、提唱した観点から考えられたとすれば、これらの現象について、どのような種類の現象が明らかにされ、どのような種類の観察が可能になるのであろうか。多くのエスノメソドロジーの研究者にとっては、エスノメソドロジーの援助のもとに産みだされた最も印象的で、強力な、ひとまとまりの研究は、会話分析（CA）の研究である。会話分析は、日常会話のシークエンシャルで、相互行為的な組織化に関する経験的な研究の大きなかたまりを作りあげてきた。これらの研究は、トークの最も微妙なレベルで会話の組織化の構造が作動していることを具体的に示している。

エスノメソドロジーによる分析の特徴は、それが、調査している現象についての記述を強力で、詳細な方法で根拠付けようとするところにある。エスノメソドロジーは、できあいの理論から分析的なカテゴリーを引き出す代わりに、これらのカテゴリーが言及する実際の行為を可能な限り密接に参照することで、そのカテゴリーを定式化するという原則に付きしたがう。そうして、リアルな世の中の社会的な出来事を、よりたやすく分析し説明できるようにした理想化された現象に「簡略化」すべきだという考えを拒絶する。それは、可能な限り、自然に起こる行為の内容を維持するよ

うな調査の技術を奨励する。このように、エスノメソドロジーによる研究では、音声と画像のテープによるデータの使用に強い好みがある。これらのデータの形態には、2重の利点がある。ひとつ目は、行為の微細な詳細を密接に検討することが可能にしてくれることで、ふたつ目は、それらが、読者が分析の基づいている実際のデータを利用できるように、公平な閲読のために、再産出することが可能だということである。

会話分析は、このトークのテープ録音の途方もなく詳細なトランスクリプトを使用することで、この方法論的な原則にしたがっている。だが、CAが、エスノメソドロジー的な方向づけを示すのは、単に極度の密接な注意を詳細に向けるためではない。これらの素材を分析する点で、会話分析は、話者が、それを通して「日常会話」の構造的な特徴を達成する構造を同定することを求めている。会話のトークの、トークそのものの道筋で話者によって達成された会話のトークのパターン化された整然とした属性の方法を分析することに関連している。会話分析者たちによるそうした素材への取り組み方は、自己・産出と自己・組織化としての社会的な行為というGarfinkelによる概念化を具体的なものにしてしている。

研究の伝統としてのCAの確立における中心人物は、Harvey Sacks (1936-1975年)である。Sacksの研究の多くは、彼が1964年から1972年のあいだにカリフォルニア大学（Irvine）で行った講義を謄写印刷のトランスクリプトにするという形で残されている。この素材の大部分は、刊行されていないままになっている。Sacksがこれらの講義で調査した会話の現象の多様性は、莫大なものである。物語の語りから、冗談の会話まで及び、代理となる用語（物事に対する省略された言及を構成する言葉、たとえば‘we’, ‘it’, ‘here’な

ど)の使用の導入の業績までを含んでいる。とはいえ、小数の重要な論文が、彼が2人の同僚、Emmanuel SchegloffとGail Jeffersonと共同で産みだした研究として刊行されている。これらの共同執筆の論文は、Sacksと、その協力者たちが、非常に一貫して会話のシークエンシャルな組織化に焦点を当てるようになったトピックに関連するものである。私たちは、会話のこの次元と、彼とその協力者たちが提示した主要な発見についての関心の性質を、簡潔に特徴づけることにする。

会話とは、非常に多くの著しく明らかな特徴をもつ。これらのひとつは、それが特徴において^{シークエンシャル}だということである。いかなる会話も、発話の一続きのものとして見れば、これらの発話がお互いに特別な方式で、^{続いて起こる}ことが理解できる。それらは、「シークエンシャルに結び付けられている」のである。この結びつきは、発話から発話ごとに作動する。会話におけるすべての発話を、お互いに相対するものとして、たとえば、交わされている最中の会話の発端と、いかなる順序かを予測できるようなものとして、位置づけを決める総体的なルールとか、構造というものは存在しない。会話は、自発的な行為なのである。それは、現場で、その産出の道筋で発展するものである。とはいえ、少なくとも、会話には、認識可能な始まりと終わりがあるという認識では、ある種の総体的な構造的な組織が存在する。それらは「ただ始まる」のでも「ただ終わる」のでもない。会話の始まりには、ある種の適切で認識可能な発話が起こり、会話の終わりにも、適切な他の発話が起こる。

ふたつ目の大いに明らかな特徴は、会話が相互行為的な活動だということである。それには、^{ターンを巡るやりとり}が含まれる。話者は、トークのターンをはじめに引き受け、他者のトークの

受け取る相手または聞き手としてのターンを引き受ける。ターンを巡るやりとりの行為としての会話の基本的な特徴は、「ひと時には、ひとりの人物が発言する」という原則にまとめられる。これが、経験的な事実の陳述というよりも、むしろ、規範的な原則だということは、いかなる実際の会話を密接に詳しく調べることによって、見てとれる。しばしば「重複」が起こることも見られる。また、いかなる会話でも、多くの場合に、誰も何も話さない「間」があるのと同様に、複数の人が同時に話す場合がある。だが「重複」や「間」が起こる場合は、参与者たちによる会話という「作業」が、これらの出来事を問題のあるものとして、見て取ることができ、たとえば、ひとりの話者がひと時に話すという「適切な」状況を回復するために企てられたさまざまな種類の「修復の作業」がある。

Sacks, Schegloff, Jeffersonらは、会話のターンを巡るやりとりの「問題」を、技術的な現象として、考えている。これは、彼らが、話者が、ターンを引き継ぐのが難しいと思うということの意味しているわけではない。対照的に、会話は、社会の適格な能力を持ついかなるメンバーも、他の誰とでも従事することができる行為である。その代わりに、それが意味していることは、ターンを巡るやりとりを達成するために使われている方法を、技術的で、^{社会学的な記述の対象となるもの}と見なしているということである。彼らが記述しようと願っているのは、どのように、会話のシークエンシャルな性質と、その「一度にひとり」という相互行為的な性質が、^{構造的に関係しあっているか}ということである。彼らの分析では、会話のターンを巡るやりとりを組織しているルールは、(a) 発話が、ひとつずつ行われることを基本とし、(b) 単一の話者の移行を組織化するため

にだけ役立つものとして、働くのである。これらのルールには、3つの特徴がある。(1) 話者のトークの移行の時点を設定し、(2) そのような時点で、通用する代替の移行の可能性の組み合わせを設定し、(3) これらの可能性を、優先順位の秩序によって構造化することである。これらのルールを「ひと時にひとつの移行」に適用する特殊性が意味することは、会話の特徴の総体的な特徴であり、話者の順序や発話の数が、それ自身が系統的に組織されるものではなく、ターンを巡るやりとりの構造が、会話の道筋にわたって、作動してくる特別な方法の結果なのである。

会話がシーケンシャルだと言うことは、発話が、結び付けられた発話として産出され、聞かれると言うことである。この事実は「直接に先立つ発話に結びつけられたものとして、現在の発話を産みだしている(聞く)」こと一と、話者のターンを巡るやりとりの組織化のあいだを結びつけるルールの間のつながりに対して、手がかりを提供するものである。それらが結び付けられるのは、会話の発話がさまざまな種類の発話行為を実行することができるという事実のおかげであり、それらの発話行為には、たとえば、挨拶や、不平や、リクエストや、提案などが含まれる。発話行為が、シーケンシャルな構造に、組織化されるのは「条件下で適切となる関連性」の関係性がそこで得られる一部の間でのことなのである。条件下で適切な関連性の最も強力な形態は、発話行為の「隣接したペア」の2者のあいだに適用される。隣接ペアの関係性は、シーケンシャルな行為の構造の最もありふれた形であり、それから、ふたつ以上の長さの発話が構成されるすべての構造の素材なのである。さらに、隣接ペアは、会話のターンを巡るやりとりの運用に根本的なものなのである。そのような最初のペアを産出することに

よって、話者は、話者の交代と、次にどのようなことが行われるべきかを投企することの両方を生じさせる。この最初のペアの部分が産出されるとすぐに、話者の交代が起こるべきで、次の話者は、その発話のタイプ、または、代替する発話のタイプの組み合わせのひとつを、適切なふたつ目のペアの一部を構成するものとして、産みだすべきなのである。

したがって、隣接ペアに対してなされる定義は、(a) ふたつの発話のシーケンスであり、それは、(b) 隣接しているか、(c) 異なる話者によって産み出されたものか、(d) 最初の部分と、ふたつ目の部分として秩序づけられたものか、(e) 最初のペアが、特定の2番目の分(または、ふたつ目の部分の範囲)を必要とするように、結び付けられている、ということである。

この構造は、行為の規範的な準拠枠なのである。言い換えれば、それは、メンバーによって、特定の行為がとるべき強制力のある形式として、「普通で適切な」ものとして扱われる。この規範的な方向づけが最も明らかなケースとは、行為のシーケンスで、話者による産出が、隣接ペアの「基盤となる構造」を順守しない場合である。私たちは、そのような「逸脱のケース」の3つの実例を挙げておく：

(1) Atkinson and Drew, 1979, p.52

Ch: Have to cut these Mummy

(ママ、切って)

(1.3)

Ch: Won't we (切ってくれないの)

(1.5)

Ch: Won't we (やって)

M: Yes

(2) Heritage, 1984, p.250

J: But the train goes. Does th'train go on th'boat?

(けど、電車がいつてしまった。電車は船に乗ったの)

M: .h.h Ooh I've no idea. She hasn't said.

(知らない。彼女、言ってなかったよ)

(3) Schegloff, 1972, p.78

A: Are you coming tonight?

(今晚来ますか)

B: Can I bring a quest?

(友達を連れてきていいですか)

A: Sure (どうぞ)

B: I'll be there. (うかがいます)

実例(1)では、その子供による最初の質問は、母親からの応答を引き出すことができないでいる。その子供は、質問を、再び始めるが、それでも、再び、何の応答も用意されていないとき、それをまた再び始め、それは2回目の繰り返しになるのであるが、今度は、質問に対する応答を得ている。私たちは「再び始める」という言葉を使っているが、それは、その子供がターンに、もとの質問を繰り返しているだけではないことを認めることができるからである。その子供の2番目と3番目の発話は、その質問を「切り縮めた」形態で、再度、公式化しており、それによって、母親による返答の「不在」を、動機づけられた行為で、最初の発話が聞かれなかったものとしては、扱わない。このように、子供の2番目と3番目の発話は、2番目のパートの「適切に関連した不在」に対する規範的な聞きとりを、それら自身のうちに、表している。

実例(2)では、話者のJによって尋ねられた

質問は、話者のMによって応答されるが、「はい」とか「いいえ」という答えは与えられていない。Jによる質問は、子供による母親への質問とは似ていない。この点で、前述の実例とは異なっており、Jは「確認を求める」質問というよりも、むしろ「情報を求める質問」と呼ぶことができることを尋ねている。この質問を、Mに対して向けて言うことは、MがJには足りない適切に関連した知識があることを暗に示している。Mが彼の2番目の発話の部分で組み立てて、応答しているのは、この言外の意味に対してなのである。Mが、はい/いいえの答えを産み出すことができないことを説明する返答は、彼の無知に表現を与えることと、これを、適切に関連した知識('She hasn't said')を持っていない他人に言及することによって説明している。

実例(3)は、ある質問が最初の質問の「答え」とは聞こえない別な質問によって、どのように応答されるかを例証しているが、条件下で適切に関連した答えは、「適切に不在」とは扱われない。Aの最初の質問は、招待として聞くこともできるものである。Bによる返答は、招待を受け入れるか、辞退するかという条件下で事柄を提起するものとして聞くことができる。専門用語で言えば、Bの質問と、Aの応答は、「挿入のシークエンス」を構成する。それが、一時的に、最初の質問の条件下での適切な関連性を「保留」している。挿入のシークエンスを通して、それらはそのものが、隣接ペアとして構造化され、投企されたペアのシークエンスが、ふたつの発話の長さを超えて「拡張され」うる。

隣接ペアが作動するには、話者たちが、その会話の相手に対して、特定の種類の発話行為として認識可能な発話を産み出すことが必要である。この認識可能性を達成することによって、話者たち

は、彼らの発話をそのトークの社会的な機会の特殊性、すなわち、「今ここ」に対して認識可能なトークを産み出すことに、専心する方法で産み出す。この特殊性のひとつの側面は、会話の相手が相互行為的に適切に関連している知識を持っていると期待できることなのである。専門用語で言えば、話者は「受け取る相手へのデザイン」という必要要件を志向する。言い換えれば、彼らがトークを産み出す方法は、その人たちが、誰と話していて、どのようなことを、その人物が、適切で、適切に関連したものとして知っていることと想定されるかを考慮していることを表している。専門用語を使わずに言えば、相手へのデザインという原則は、「会話の相手がすでに知っていることを言わずに、それを使え」(Schegloff 1979)として表現できる。このような方法で、彼らは、この原則を志向し、会話者たちは、彼らのトークが、この機会をこの会話の相手とこのトピックについてトークを可能にするために構成する。

多くの人々にとって、CAは、エスノメソドロジーによる経験的な研究の最も印象的な部分を代表している。その達成は、詳細で簡潔な方法で、どのように会話の組織化が、高度に「文脈に応じた」力強い一般的な構造を含んでいるかを例証しているのである。これらの構造において、それを通して、会話者たちは、それ自体において、一般的ではないが、現場でのローカルな社会状況に特別で、特有な会話を組み立てる。「仕組み」は、一般的なものかもしれない。だが、その現場でのローカルな使用と特殊な結果には、一般的という言葉は当てはまらない。

ワークの研究：エスノメソドロジーと「自然に起こる普通の行為」の研究

会話のシークエンスの機構を一般的と呼ぶこと

によって、私たちは、それが、会話以外のいかなることをするための機構であることを暗に意味しているわけではない。もちろん、多くの社会的な行為は、トークを通して、実行され、しばしば、このトークは、いくつかの点で「日常会話」に類似している可能性がある。会話そのものが、非常にありふれた社会行為である以上、メンバーが、他の種類の「トークをするという活動」をしたり、彼らが採用するリソースが、彼らが日常会話を産出するときに使うリソースから、由来したり、類似したりすることは、驚くには当たらない。数多くの研究が、これが実際に実情であることを示してきている。たとえば、教室などにおける相互行為 (Mehan, 1979)、産業における交渉 (Francis, 1986)、そして、医師と患者の相談 (Heath, 1987) には、日常会話に見られるシークエンシャルな機構の適応であるシークエンシャルな機構が含まれている。これらの機構に「適応」として言及することは、会話の構造とそれらの差別的な属性に対して、注意を引くものである。それというのも、トークを通じて行われた他の行為は、いくつかの点で、会話と似ている。もちろん、事実上、これらの行為の参与者たちが、日常会話を「している」わけではないという事実は残るからである。すなわち、彼らは、教えたり、交渉したり、医学的な相談を「している」のである。これらの行為の顕著な特性は、少なくとも、部分的には、会話の構造が、教室や重役会議室や相談室での「仕事」をするために「修正」されている特有な方法に見られる。

近年では、Garfinkelは、活動の詳細で顕著な内容を把握することになるような社会学的な研究の必要性をますます強く強調してきている。この必要性を表現する、彼の好みの方法は、1950年代に、Fred StrodbeckとEdward Shilsのあい

だで交わされた逸話に関するものである。彼らは、Strodtbeckの陪審団に関する研究、とくに、彼の小集団としての陪審団の分析の論文について、議論を交わしており、「小集団の理論」の概念と方法を使っている。議論のある時点で、Shilsは、Strodtbeckに「どのようなことが、陪審団を小集団にしているのか」を尋ねるかわりに、なぜ「どのようなことが、陪審団を陪審員たらしめているのか」と問わないのかと尋ねた。Sillsは、これが素人の問うようなことだと説得された。だが、Garfinkelは同意しない。社会学的な研究は、一般化可能な方法で、行為を記述するその関心において、問題となる行為の詳細な内容を無視して、つじつまをあわせる傾向がある。したがって、Garfinkelは、社会学的な研究において「何が欠落しているか」に言及する。たとえば、社会学的な研究では、工場での組み立てラインの仕事から、ジャズ・ミュージシャンであることまで、多くの職業の研究を見ることができ、だが、これらの研究に、実際の営みとしての仕事そのものに関するいかなる詳細の記述や分析を、そのリアルな世界で、経験された特徴として、見ようとしても無駄なのである。

このような不在という理由から、Garfinkelが主張しているのは、そのような行為を研究するためには、社会学者たちは、それらに対する適切な社会学的な記述が存するものを、彼らがすでに知っているかのように行為しているということである。その活動の詳細で、特有の特性、それを、この活動であり、他のものではなくしているものは、したがって、いかなる関心としても扱われていない。だが、Garfinkelは、私たちが事前に、ある行為が持っている社会学的な特徴を知ることができるという仮定を拒絶している。Garfinkelが追求しているのは、どのように、それが、認識

可能で「リアルな」行為として達成されるかを発見するために、行為の「this-ness/これであること」に焦点を当てることである。

Garfinkelと他の研究者たちのこれらの路線に沿って実行した研究は、2重の意味で「ワークの研究」なのである。それらの多くは、仕事として、共通の著しく記述的な行為、人々が仕事としてすること、あるいは、それらの仕事の一部に関するものである。だが「ワーク」という用語は、ここでは、分析的な意味でも使われており、活動の「本来の場所での達成」に言及するものでもある。この意味では、結果を達成するための努力と時間の消費を含む、いかなる活動も、それを構成する「営みとしての仕事」として研究することができるのである。このように、エスノメソドロロジーの研究者の活動が研究してきたものは、複数部品からなる車輪の問題を解決したり (Baccus, 1986)、バスケットボールをしたり (MacBeth, 1989)、航空管制官のコントロールパネルを運営 (Anderson et al. 1989) と同様に、ホワイトボードに関するコンピューター・シミュレーションを設計したり (Suchman, 1988)、数学的な証明を構築したり (Livingston, 1986) などである。

Garfinkelは、これらの活動について「自然に起こる普通の行為」として言及している。一見すると、この記述は奇妙なものに思われる。常識的な用語では、バスケットボールは、「普通の」活動であるかもしれないが、航空管制管や、人工知能の研究者であることは、確実に普通ではないのではないだろうか。とはいえ、Garfinkelが強調しているのは、実践者の見地から、これらの活動が実際に「普通である」ことなのである。もし、あなたが航空管制管だとしたら、航空機の動きを制御するレーダー・スクリーンを使うことは、日常的な仕事のお決まりの内容となるのである。こ

これは、そのような仕事が責任あるもので、重要だということを少しも否定するものではない—結局、数百人もの航空機の乗客の命が、管制管の下す決定に左右されるのである！だが、これらの決定を下すことは、管制管にとっては、普通の日常的な行為なのである。管制管は、レーダー・スクリーンをどのように「読み取る」かや、それが示すブリップ（レーダー・スクリーン上で他の飛行機・潜水艦などの位置を示す輝点）から、上空の航空機の位置をどのように判断するかを知っていることなどを含む能力を当たり前のことと見なしている。エスノメソドロジーの研究者が記述しようと追求しているのは、これらの当たり前とされている実践的な能力なのである。

エスノメソドロジーの研究者が「自然に起こる普通の行為」について行っている研究の種類をさらに具体的に示すと、私たちは、Michael Lynch (1985) による動物の脳の機能に関する実験的な研究に従事している心理・生物学の研究室の調査に関する研究を見ることになる。Lynch が研究したいと思ったことは、どのように研究者たちの科学的な行為が、実践的な行為として実行されるかということである。すなわち、どのように「発見」がなされるか、どのように実験が「成功」とか「失敗」とか判断されるかであり、どのように「結果」が達成され、他の結果に対してチェックされるかとか、どのように、研究が向けられた対象が認識され、同定されるかなどといったことである。Lynch が指摘したことは、社会学者や歴史学者や哲学者によってなされた科学の記述が、典型的には、科学者たちが実際にしていることよりも、むしろ再構成されて、理想化されたものだということである。これらの理想化された記述が、通常は、社会的な行為あるいは、知識の形態としての科学の本質を特徴づけることを狙いと

している。対照的に、Lynch が狙いとしているのは、科学の詳細な実践的な仕事を分析することである。

研究室の仕事の多くは、通常、ネズミから採取した脳の組織の標本の構造を検討をすることにある。脳組織の断片のスライドが用意され、光学的または電子的な顕微鏡で検討される。このようにして、脳の構造とプロセスに関する理論が発展され、テストされる。これらの標本で研究を営むことにより、研究者たちは、極めて頻繁に「人工物」に出くわす。人工物とは、ある標本の可視的な特徴、または、ある標本の表象（たとえば、電子顕微鏡からのマイクロ写真）のうち、「そこにあるはずのない」ものである。人工物は、研究者が見ることができる「はずの」「実際の」現象を表していない。それは、脳の組織の「リアルな」特徴ではなく、研究室の技術の何らかの誤りや失敗の産物なのである。たとえば、ある人工物は、スライドの準備における着色料の不注意な使用に由来する「着色の誤り」と同定される。あるいは、それは、切断のプロセスで、標本をマイクロトームでこすったことによって起きた、写真の筋の「ナイフの筋」かもしれない。したがって、人工物は「問題点」なのである。それらは、研究の障害になり、研究者たちに多大な欲求不満を引き起こす。

Lynch が発見したことは、人工物の形態が、著しく、研究室の相互行為的な行為に見られるということである。新参者たちは、人工物の「典型的な原因」と、それらを最小化するための研究のすべての段階で気にかける必要を教えられる。それらが見つかったときには、それらの含蓄に関して、決定が下されなければならない。たとえば、ある標本を、研究の目的のために、使えないものとするのかどうか、といったことである。Lynch が特筆しているのは、これらの決定が、特別な実践的な状況の観点から下されるということであ

る。スライドや写真の「不完全な」ものが使われたかどうかは、何らかの普遍的な絶対的な基準に左右されるのではない。その機会のローカルな状況に左右されるのである。このように、研究者たちは、自分たちが、さらに多くのものを用意する時間があるかどうか、あるいは「だいたいぶな」標本が他にあり、無効にされた標本が「補強証拠」としてのみ使用される必要があるか、あるいは「完全な」実例が研究の刊行に必要とされるかどうかを、自問する。

エスノメソドロジー研究の見地からは、研究室の研究者たちが対処しなければならないリアルな問題としての人工物の問題の、事実に基づく特徴は、それらを「認め」、「組み立て」、「説明する」ことを含む、実践上の理由付けによって構成されている。あるスライド上の何かが「人工物に違いない」と研究者たちが理解することができるのは、彼らが、探すべきものを「知っていて」、それらがどのように見える「はずか」を知っているからである。このように研究者たちは「誰の過ちでもなく」、彼らがそもそも目に見えるものとしている現象そのものを、研究所の器具がときとして「歪めてしまう」ことを「知っている」。この知識を行使することによって、どうして自然現象が、それらを観察可能にしている同じ技術的な手続きそのものによって「歪められる」ことがあるのかといった論理的な問題としては扱わないのである。彼らの関心は、完全に人工物の実際上の意味合いにあり、それらの論理的あるいは認識論的な事態にはない。ありうる人工物が「発見された」とき、研究チームのメンバーは、それについて、何をすべきかを考慮に入れ、決定する。意見が募られ、解釈が提供され、結果として、その特徴をさらに詳細に調べるか、無視するかに関する決定が下される。さらに研究を進めるコース

で、研究者たちは、前に認められた特徴が何で「あったに違いないか」を示す付随的な標本を取り扱う。

Lynchの研究は、そのとき、科学という事実が、どのように、研究室の研究で日常的な行為において社会的に構成されるのかを示している。彼の目的は、どのように科学が理想的に行われるべきかという何らかのバージョンの見地から、これらの行為を批判するものではない。むしろ、エスノメソドロジー研究者として、Lynchは、どのように研究者たちが、研究室の日常的な繰り返しの中の、状況に即した判断にしたがう研究の実践的な結果として「科学的な知識」を産み出すのかを示している。

エスノメソドロジーへの批判

私たちが以前に述べたように、エスノメソドロジーは、社会学の「主流」に組み込まれることに抵抗してきた。ことによると、この理由によって、ほとんど他のいかなる取り組みよりも、批評家たちによって、批判を受けることになった。私たちは、最もありふれた批判のふたつについて、すでに言及している。—それらは、エスノメソドロジーが、個人に対して社会的な生活が「強いている」特徴を否定しているというものであり、また、エスノメソドロジーが提案するのは、社会学には、物事のメンバーによるバージョンを再現する以上のことはできないというものである。私たちは、どちらも誤解に基づいていることを提唱してきた。また、どちらの批判も、エスノメソドロジーとは、非常に異なる理論的なコミットメントをしている社会学者たちが発する傾向がある。それらが帰するところは、エスノメソドロジーが、他の取り組み方がとっている方法で、これらの事柄を考えないという非難である。その非難に対し

て、エスノメソドロジの研究者は、「いや、もちろん、同じではない」回答しがちである。

もうひとつのありふれた批判は、他の社会学の取り組みで概念化されたトピックとの比較で、エスノメソドロジは、微に入り細をうがつ社会プロセスに関わり、通常「些細な」事柄の研究という結果に終わっているというものである。エスノメソドロジ研究者は、この批判もまた「視界の偏り」を反映するものと主張している。エスノメソドロジ研究者が強調しているのは、自分たちがその研究に関する考え抜かれた理論的根拠を持っているということである。それは、ちょうど、他の種類の社会学的研究に活気を与えているのと同じぐらい知性的に弁護できるものである。

より根本的な批判は、エスノメソドロジの研究者がメンバーの方法を研究する手段に関するものである。だが、それにしても、批判者たちは、彼ら自身の議論において、同時に、これらの方法を採用している。批評家たちは、エスノメソドロジそのものが、組織化された社会行為であり、したがって、それがどのように実践的に達成されるのかを検討することができることを指摘している。これは、ときに「ラディカルな相互反映性」の問題として言及されるものである。すなわち、研究の研究に対する研究…等ということになる。エスノメソドロジの研究者は、この無限の逆行が論理的な可能性であることを認めている。とはいえ、エスノメソドロジの研究者が指摘しているのは、これは、日常的な世界を分析することに関心を持つ社会学者よりも、むしろ哲学者の問題だということである。エスノメソドロジの研究者は、エスノメソドロジによる研究は、エスノメソドロジの研究から作られうることを受け入れており、さらに、エスノメソドロジの研究は、エスノメソドロジによる研究に対するエスノメ

ソドロジの研究から作られうること等を受け入れている。エスノメソドロジの研究者が主張しているのは、決して社会学にとっての根本的な重要性が暗示されることではない。したがって、この連鎖にしたがって、際限なく続けることは、エスノメソドロジの研究者の特別な関心ではない。さらに、この連鎖にしたがって、いかなる場所で、いかなる説明が産み出されることも、それがメンバーの実践上の理由付けの常識的な使用によって達成されることを必要とする。エスノメソドロジの研究者の関心は、これらの方法にある。

結論

私たちのこの章を、シンボリック相互作用論とエスノメソドロジのあいだの類似性と相違に関するいくつかの論点で締めくくりにする。一般的なレベルでは、それらは、社会的なプロセスの質的な研究を強調する点で、類似している。それらは、もちろん、解釈的な学問領域としての社会学の意味を通して、構成されたものとして、社会生活に対する彼らの見解という点でも、類似している。どちらの取り組みも、社会生活における言語の中心性を再評価することに貢献してきた。したがって、はじめて社会学に参加する学生たちが、しばしば、それらのあいだの何らかのリアルな相違を理解するのに苦勞することは、理解できる。

とはいえ、それらの違いは、接近して精査してみれば、認識するのは困難ではない。シンボリック相互作用論者の研究は、典型的には、何らかの集団の行為者たちが共有する「社会的な意味」を同定することに関わるものであり、行為者たちが、お互いに、そして他の集団と持つ関係という見地から、これらの意味を説明することに関わ

る。このように、シンボリック相互作用論者は、行為者や、その信条や行為、そして関係性に関わりを持つ。エスノメソドロジエの研究者は、対照的に、行為者よりむしろ、行為に関りをもつ。エスノメソドロジエの研究は、意味を可能にしている研究ほどには、意味に対して、尋ねることはないものである。エスノメソドロジエの研究者が尋ねることは、どのようにそのような意味が「現場でローカルに」管理されるかと、場にいるメンバーが、彼らの理解の、ここで、今の実践的に適切な関連性を達成する方法である。エスノメソドロジエの研究は、シンボリック相互作用論者の研究が始めたところで、終わると言ってもよいだろう。

この相違は、シンボリック相互作用論からエスノメソドロジエへの移行としての分析的な焦点のレベルのシフトとして特徴づけることができるだろう。このシフトは、採用されている概念の違いに明らかである。シンボリック相互作用論の人が「自己」と「他者」、「共有された象徴」と「共同の行為」について語るところで、エスノメソド

ロジエの研究者は、理解の「現場でのローカルな産出」や、状況に即した特別なものに対してメンバーが「意味をとる」方法について語る。それはまた、シンボリック相互作用論とエスノメソドロジエの研究の「スタイル」の独特の相違を特徴づけるものでもある。前者は、典型的には、印象主義的で「厳密でなく」。いっぽう、後者は、はるかに技術的で精密な傾向がある。

とはいえ、最も顕著な相違は、ことによると、その人たちの研究のプログラムの活力にあるのかもしれない。私たちがすでに述べたように、シンボリック相互作用論は、その最も生産的な段階を過ぎたように思われる。いくつかの申し分のない経験的な研究は、相互行為論の伝統の中で依然として、行われているが、近年には、新しい考え方は、ほとんど現れていない。他方で、エスノメソドロジエは、依然として、その考えを発展させており、研究すべき新しい現象を見つけている。そして、それは、おそらく、いかなる社会学的な考え方に対しても、厳密な検討なのである。

1998年版（一部抜粋「コミュニケーション紀要」25号82頁の続き）

会話分析とは、いかなるものか

〔文脈と意味といった〕これらの関心のよく知られた、具体的に示された例が、会話分析である。エスノメソドロロジーの派生的な結果として始まった会話分析は、いまでは、まったく独立した冒険的な企てである。エスノメソドロロジーそのものように一現在のところ、社会学では、周辺的なものであるにもかかわらず、言語の研究に関心を持つ専門科目のあいだでは、重要な地位を占めている。

会話分析を発展させた動機付けは、エスノメソドロロジーが、行為の研究に対して、提案したものである。すなわち、行為を、その実践的な内在的な組織化のために検討することである。会話とは、参与者たちが、その人たちの行為—このケースでは、そのトークを—お互いにすすめる行為として、適合させるための相互行為的な行為である。会話分析の創始者である、Harvey Sacksは、会話は、実践的に組織化されるに違いないと理解した。たとえば、会話を処理する人々の、その道筋において、組織されると理解した。

会話分析は、どのように働くか

人々の会話の行為を音声テープで録音したものを、行為の道筋の着実な組織の綿密な詳細の研究を可能にしているのだが、それは、音声テープが、何度でも再生することができ、それらの内容の最も注意深いトランスクリプトを作ることができるからである。これらのトラスクリプト化は、会話を続ける発話行為の正確な形態と、それらが互いに適合し合う方法について、膨大な量の詳細をとらえ、調査記録をつけることを単純に回

避けるような、種類の詳細を生み出してくれる。

会話の研究は、また、意味をくみとる作業の検討も可能にするものである。もちろん、会話を続けていくことには、それぞれが話していることに対するお互いの貢献と理解を相互に認識しあうことが含まれている。取り戻せるトークの記録を所有していることによって、発話行為の精査が可能となった。発話がとる形態から、どのように、当事者としては、トークが理解されるのかを理解することが可能になった。そのような意味の理解は、もちろん、埋め込まれた出来事であり、会話の状況と会話の時間のもとでなされ、たとえば、当事者たちが、そのやりとりに対して、会話を続けながら、お互いを理解し、自分の番になったら、何を話すべきかを決めなければならないが、それは、事実上、大変な量の時間に対して、即座の応答が要求されるからである。さらに、会話の組織化には、徹底的に即興的な特徴がある。それは、その道筋において、次第に出てくるものなのである。会話には、その始まりから、中間の段階を通して、終わりにいたる秩序だったコースがあり、しばしばトピックからトピックへの秩序だった連続が含まれる。何について話すことになるか、どのように、その事柄に関して、話されることになるかは、会話の開始に先立って、決められているわけではない。当事者たちは、彼らのフレーズからフレーズへの、会話のトピックからトピックへの彼らの動きを協調するが、彼らがそうするのは、なんらかの明白に事前に決められ、作り出された手続きにしたがってのことではない。会話のそれぞれのポイントで、彼らは、次に何をなすべきかと、何であれ、次になされなければならないことが、トークの組織化のための秩序—たんにその時点で達した秩序のみならず、総体的な秩序—

に貢献し、それを達成するために、どのようにすべきかを、苦心して達成する。

最後に、だがとりわけ、会話に対する貢献の形成は、非常に明確に状況に即したものである。会話の整然として秩序だった進行の産出には、会話の間の意味や、偶発事態や、急場や、それを悩ませるものが含まれる。ある所与の会話について、この論点について語られてきたことと、なされたことの特異性は、それが前に語られたことすべての観点から、適切に理解されることを保証するために、現在の貢献者が何を言うべきか、どのようにそれを言うべきかを定めるために、欠くことのできないものなのである。たとえば、その人は、議論が佳境にあるとき新来者が加わるという急場に対応しなければならないかもしれない。話者たちが、どのように現在のトークを理解するかという観点からは、分析は、そこでの話者たちが、ふたつの中心的な疑問をやりくりするということを前提として進行する。

- 1 なぜ、いま、それなのか
- 2 次にすべきことは何なのか

会話のターンを巡るやりとり

これらのふたつの疑問について、実践的な問い、そして答えるという観点から会話を研究することで、会話分析は、会話のトークのターンを巡るやりとりの組織化に、その最高の位を与えるようになった。ついには、トークのターンが、トークの参与者たちのあいだで共有される方法に対する精巧に系統的な説明を発展させるにいたった。

ターンを巡るやりとり

話者が何について話しているのであれ、彼らがそうしているのは、トークでそれぞれのターンを

とることでそうしている。ある人が何か言い、別の人がそれに返事をし、誰かが、第2の返事に対してコメントし、第1の話者がまた話をする、などなど。会話に対する当事者が、何について話すのであろうと、彼らがトークをする方法は、そのようなターンへの「進行中の」配分という枠組みの中で行われなければならない。

結果として、トークの研究に対するひとつの課題は、そのような分配におけるふたつの主要な問題に関するターンの割り当てに対するものでなければならない。

- 1 いま話をしている人物が、話をするターンを完結することができる。そして、
- 2 そのような方法で、最初の人物が完結するやいなや、次の人が即座にターンを開始する。

このように、広範囲にわたる注意が、発話の形態（トークのターンを占めるトーク）が、それがいつ完結するかに関する情報を伝えている方法に対して払われる。簡単な実例として、以下の質問（発話）をとりあげよう。

A: Can I ask you a question?

（あなたに質問をしてもいいですか）

という質問は、Aに再び話す機会を与えるものである。その疑問の形式は、別の話者Bが答えることを要求している。また、ことによると、質問を尋ねる許可を与えることを要求している。

B: Sure. (もちろんいいですとも)

Aは、そこで尋ねることができる

A: Are you married?

(あなたは、結婚していますか)

「Can I ask you a question? (あなたに質問をしてもいいですか) は、特徴的に、何かしら、普通でなかったり、微妙だったり、個人的な疑問だったりすることを質問する場合の前置きのリクエストとして理解される。というのも、もし、「Can I ask you a question? (あなたに質問をしてもいいですか) によって提示された質問が「Do you know today's date (今日は何日かわかりますか) であつたら、それは、驚くべきことだろう。

そのような簡単なシークエンスにも、いつ発話¹が完結するかに関する情報の産出が、ターンを配分する²という操作—たとえば、最初の質問が、別の人が次に話すべきことを引き起こし、たとえば、Aが質問を尋ねるのだが、それはその人が再び話す機会を提供する—とともに織り込まれている。Bが最初の質問に答えたあとは、それによって、予想される質問を尋ねる機会がある。トークのターンが完結したとか、トークのターンの機会が提供されたという認識には、話者の選択のアレンジに対する検討も含まれている。たとえば、それは現在の話者が次の話者を選ぶ方法や、次の話者が、自己選択する方法などである。「Can I ask you a question? (あなたに質問をしてもいいですか) は、次の話者として、特定の人物を選ぶものである。かたや、「Does anybody know where Tom is? (だれかトムがどこにいるか知らないか) は、次の話者が何をすべきかを示すものである。—もし、その人が知っているとしたら、トムがどこにいるかを言うことである。だが、それは、話しかけられたどの人物が答えるべきかを示すものではない。

このように、話者たちのあいだのターンを循環させる形式は、非常に一般的なものとして扱われ

る。そうした形式は、それらを構成する発話と、その行為が実行する活動の特別な性格にもかかわらず機能する。この一般性にもかかわらず、話者たちは、トークのターンを取りかわすことを通して、何であれ、彼らが話したいことに関して、トークの秩序だった整然たる組織化を産み出す。それらは、エピソードになるものであり、そのエピソードとは、人々がまったく自然に始めて、終わらせるものである。会話分析の焦点は、また、このエピソードからなる会話の組織化でもあり、そのようなエピソードが、組み立てられ、結びつけられる方法でもある。たとえば、会話のエピソードの開始には、しばしば、あいさつを交わすことが含まれる。さらに、トピックに向かって前進する動きは、最初のトピックに到達するように会話の開始から作り出され、それには、会話の参加者たちが、彼らのトークを、同じこと、たとえば、共通のトピックを扱うトークになるように、組織化する方法が含まれる。会話の終わりに向けて動き方というものもある。たとえば、注意深い、拡大解釈された注意が、そのやりとりに対して払われる。たとえば、電話の始めは以下になる。

A: 何かしているところですか。

B: ちょうど、Xファイルを見ているところです。

ここで、会話の当事者たちは手すきである可能性と関わりをもっている。Aが長引く会話のために、電話で呼び出したことを示し、これがBに対しては、彼女がちょうどいまは、会話には、対応できないことを言う機会を与える。その答えは、Bが実際に、何かをしていること—テレビのショーを見ていること—を提供しているが、これが、なすべきこととして、たいしたものではない

ことを提供するものではなく、Aと会話することを優先することをとることを提供するものでもない。ことによると、Aは、何かしら、特別なことについて、話すために電話をかけたのではなく、ただ話をするためだったのかもしれない。だとすると、そこで、AとBは、何かしら、それについて話をするための、トピックを見つけるといふ問題に直面する。ここでは、Bがテレビで、Xファイルを見ているという事実が、話をするができる可能なものを提供している。

もちろん、私たちがそれに割けるわずかなページの中では、会話分析が、会話の構造の精密で詳細な道筋を検討してきた、詳細と複雑さをいくぶんでも伝えることは、単純に可能ではない。会話者たち自身が、実践的な事柄として、会話に直面し、それをやりくりする方法を描き出すという点から、その質問のすべてが尋ねられたり、答えられたりする。たとえば、ただ、頼み事をするためだけに、誰かに電話をかけたと思われることなく、何かを尋ねるために、あなたは、どんな言い方をするだろうか。以前に強調したように、会話には、組織があり、それは、会話者たち自身のあいだで、用いられ、非常に整然として秩序だった会話そのものを産出する。それに伴って表されるその秩序性は、会話者たちに、認識可能、理解可能で、わかりやすいものである。ターンを巡るやりとりの準備は、注意深く交替にされて、別のひとが明確な完結をしたら、ただちにそれに対する反応をするといった、連続的なトークのターンが首尾よく運ぶ結果を生むわけではない。しばしばトークのターンのあいだには、間隙や重複が存在する。非常によくあることとして、発話行為のあいだには、短い中断や、同時に話す短い時間のどちらかが存在するものである。間隙や重複そのものが会話分析のトピックになる場合があるが、会

話者たちにとっては、そのような中断や重複が起こることは、会話が、自然で、注意を引かず、整然としている特徴である。

結論として、会話の分析は、自己・組織的なシステムの分析である。これが私たちを導く論点は、「エスノメソドロジーとはいかなるものか」と、それを、活動の自己・組織化の研究として考慮する問題に立ち返ることが有益であるということである。

活動を自己・組織化として研究する：全体像を無視するのか

まったく普通で—非常に退屈でさえある—会話を長々と微に入り細に入り検討することは、多くの社会学者の関心や承認を引きつけてはいない。

会話分析に対する批判

会話分析を会話の些細なことに従事するものとする決定は、多くの学者たちには、より一般的なエスノメソドロジーの立場の論理的な極限の立場を取るものだ思われている。たとえば、エスノメソドロジーは、相互行為の現場でのローカル化された事例の実体がある特定の詳細に焦点を当て、それらが置かれている社会生活の全体像にたいする注目を向けることがないものとされている。

多くの社会学者たちに対して、2人の人々が休みの日に何をしているかについて会話を交わすことを通して、(たとえば)彼らの巨大企業のIBMでしている日常的な仕事の文脈で、会話を交わしているのは、それ自体が自明なことである。IBMは、主要な国際的な会社であり、20世紀の初めから、アメリカの社会の一部であり、そこには、進歩的な資本のグローバリゼーションが含まれ

ている。この複雑な環境に丸ごと、言及することなく、どのようにして、人々が特定のケースで何をしているかを理解できるというのだろうか。

私たちは、エスノメソドロジーは、社会学のゲームを演じることに同意しないということ、実際に言っている。エスノメソドロジーにとって、手続きの規則のひとつは、まさに、そのような議論のコースを避けることであり、それというもの、それを採用することが、自己組織化としての、社会的な領域という概念を捨て去ることになるからである。エスノメソドロジーの観点からは、社会学の理論は、根深い曖昧な特徴を持つものである：社会学的な調査が着想されるのは、誰かしら、見たところ、他の誰とも同じように、日常生活の世界に居住しているのみならず、この世界から身を引いて、それを外側から、または上から観察している人々による。後者の主張を廃絶するために、エスノメソドロジーは、社会学を、完全に日常的な世界の只中で、行われているものとして扱う。社会学は、その素材と、報告された観察を、この同じ世界から得る。

さらに、社会秩序の問題にたいする解決策が、即時の社会的な場面または状況の外側に見出されると仮定することは、社会学的な理論にとって、ありふれたことである。たとえば、人々の整然として秩序だった行為は、何らかの先立つ出来事のせいであると仮定され、役割期待に対する社会化、または、現在の状況を制御しているメカニズムの階層的なシステムなどの何らかの構造的な条件などによるものとされる。とはいえ、社会秩序をこのように描くことは、社会的な場面の現在、観察される整然としていること、たとえば、人々が休日の航空便に搭乗するのを待っていたり、人々を見送ったり、空港で人々が到着するのを待っていたりすることを、当たり前のことと見な

す結果となる傾向がある。関わっている人々が、彼らの行為を観察者に対して、しかも、(お互いを含めて)いかなる観察者にも、目に見えるものとし、そのような整然としたアレンジの要素とするために、行為している方法に対する、関心はまったく存在しないのである。行為の緊急事態や偶発事に関する、上記の私たちが主張している論点を考えると、厳密には、社会的場面のその場に居合わせた人々は、どのようにして、その日常的で標準的な組織化に適合するために、なにをするべきかを、知るのだろうか。

相互的なわかりやすさという意味での理解可能性

それらの行為が、他者に対して、その意味とわかりやすさを示すような方法で産み出されることは、行為の組織化の付随的な特徴というわけではない。それらの行為が、他者に対して、彼らが何をしようとしているのか認識できることは、私たちの行為に関する偶然の特徴的な事実というわけではない。私たちの行為の多くは、他者による目撃に向けられ、または、そのために、行わる。私たちの行為に織り込まれるのは、他者が、私たちの行為を同定し、私たちが何をしているか理解するために、私たちが果たす関心なのである。行為は、非常に広範に、他者を志向し、彼らとの対等関係や協力において産みだされるものであり、行為のこの同定でき、わかりやすく認識できるという特性が、発話だけの特徴であるのみならず、より一般的に行為に関する特徴となっている。

この関心を表現しようとする試みが、エスノメソドロジーに与えてきたものは、「専門用語」のひとつをもたらす。つまり、一目でそれと分かるという意味で説明可能性をもつように行為を組織

することである。それは、たとえば、行為の道筋の組織化という側面が、それらを、観察可能で、わかりやすく、認識可能で、同定することができ、それについて容易に話すことができ、そうでない場合でも報告可能であることなどである。行為の・アレンジが説明可能であると言うことには、その用語がしばしば使われる説明責任という意味はない、たとえば、政府が「教師が教室ですべきこと」を選挙民たちに説明責任があるようにするといった時のように、それを条件としたり、応じたり、とり逃したりということはない。むしろ、ここで使われる「説明可能」という概念は、ただ「行為に関わる人々について、これらの活動の組織化を記述したり、あるいは、報告したりすることを可能にするように組織化されること」を意味している。記述、すなわち、報告することには、すべての想像可能な形態にものが網羅されている。たとえば、図表や、図解や、表や、冊子や、ジョブの詳細のひと揃いや、時々のお話における論点や、その他にも延々とある。説明可能性は、行為が持っている組織化を目に見えるものとする。必然的に、それには、誰かの可能な行為の道筋を侵害する状況的な制約を認識することが含まれる。たとえば、ある人が、今すぐ実行すべき課題があり、それは後まわしにはできないことに気づいていることと、その人が、この課題に対して、責任があること、それを適切に行うことが、その人のコントロールを超えるさまざまな制約に立ち向かうことなどを表示するには、どのようにすればよいのだろうか。これらの事柄に関する誰かの推論は、その人の行為に表されている。それはしばしば、その行為に理解可能性というわかりやすさを提供する。

行為の相互的な理解可能性に対するこの関心は、他者に対して、起こっていることの意味をた

やすく手に入るものとする。それは、他者がどのようにその場が機能するかを理解することを可能にするために、社会的な場に関する可視性のアレンジと呼ばれるもの、人々が彼らの活動のために環境を準備する方法や活動そのものに対して人々が払う注意の結果手に入る。たとえば、アメリカにおける交通違反の小法廷では、訴訟のためにやって来て待っている人々が、先立つ訴訟を観察することができ、それらが処理される方法から、彼らが申し立てに入る番が回ってきたとき、どのように振舞うべきかを学ぶことができるように組織されている。これらの方法で、衆である社会の普通のメンバーは、自分たち自身が「実践的な社会学者であること」を示す。すなわち、その人たちは、実践的な社会学による理由付けに従事することができ、また実際にそれを行っている。

内側から社会学を実践する

エスノメソドロジーそれ自身の提案は、そこで、実践的な社会学による理由付けをその主要な、排他的な研究のトピックとすることである。

実践的な社会学による理由付け

これが見られるのは、生活のすべての領域におけるあらゆる種類の行為の情報を与えたり、組織化したりすることである。社会における位置付けと倫理的な序列の中の行為の位置に関わらず、社会におけるいかなるすべての行為も、実践的な社会学による理由付けの適用として検討することができる。もちろん、それらの行為そのものが尊敬されていたり、軽蔑されていたりするという事実も、実践的な社会学による理由付けの構成要素となる。

意外なことではないが、実践的な社会学による

理由付けは、また専門家としての社会学者の研究にも浸透している。したがって「社会学者という肩書きの職業生活を営んでいる人々の研究もまた、たとえば、水脈をうらなったり、万引きしたり、エスノメソドロロジーの研究者たち自身の研究と、同じ方法で検討できる。この関心の追跡は、エスノメソドロロジーのプログラムを定義し、天文学者や、ミュージシャンや、歯科医や、警察官や、営業職の人々や、トラックのドライバーや、航空管制官などの人々の職業の研究に導くものである。そして、そのような行為には、数学的な計算や、水道やガス管の修繕や、カンフーの練習や、6歳児のクラスのお話を聞かせることや、殺人の容疑者から自白を誘導することまでが含まれる。さらに、研究には、教育心理学者に、彼らの仕事についてインタビューすることや、中間施設での麻薬の違反者に関するエスノグラフィーなどがある。

私たちは、いま、この章の発端に、提示した相対儀主義という問題に立ち返ろうとしている。相対主義の告発は、私たちがちょうど述べてきた論点によって正当化されるように思われるかもしれない。結局、水脈を占うことや高等物理学は、やつぎばやに言及されてきたが、魔術の行為も科学の行為も同じ方法で研究さえるべきことが、提示されてきたのである。そうすることによって、私たちは、占いを、医療の仕事の社会的地位のパラダイムと同等視するなどという、狂気じみた、人を惑わすような考えを採用することによって、地位の格付けを超えてきたのである。それに加えて、社会の他のメンバーたちと比べて、専門家としての社会学者の「特権を剥奪することもある。専門家としての社会学者によってなされる社会学による理由付けの唯一の弁別的な特徴は、それが生計のために行われることである。他方では、他

の誰もが、社会学による理由付けを、どのようなことであれ、社会で彼らが実行している事柄に関する省察しない一部として行っている。エスノメソドロロジーに関する相対主義者の（誤った）概念を抱いている人々によれば、教訓は、表面上は、以下のように描かれることになるだろう。

- ・科学的な社会学は、常識的な社会学と同程度のものである。
- ・物理学は、水脈占いと同程度のものである。そして、
- ・したがって、ものを考えるいかなる方法も、ほかのいかなるものとも同程度に満足なものである。

相対主義に関する懸念は、さらなる問題とつながっている、すなわち、相互反映性である。

相互反映性

この論点は、上記の論点のさらなるひとつの要素に由来する。エスノメソドロロジーの論理によれば、専門家としての社会学者（エスノメソドロロジーの研究者自身を含む）の仕事も、エスノメソドロロジーの用語系で語る事ができる。この論点は、相互反映性の概念という見地から理解され、相互反映性とは「そのものに適合することを」意味している。

今日では、社会学を行うことそのものが社会的な行為であり、したがって、社会学の概念と理論が、それ自身に対して適用できることに注目することが、流行している。たとえば、それは、機能主義者の議論では、機能主義は、それ自体には適用されない、すなわち、機能主義者の分析に機能主義による議論を適用していないことに対する批判である。エスノメソドロロジーは、この種の見解

を開拓したものとして見られている。たとえば、その議論は、そのものにも適用されるべきであると主張している。とはいえ、理解されているところでは、この概念は、さらに重い積荷を運んでおり、それというのも、自己適用というものは、あまりにもしばしば、自己破壊という結果に終わることも、議論されているからである。

自己破壊

もし機能主義者の議論が、機能主義者の議論そのものに適用されるとすれば、それらは、疑われることだろう。たとえば、Durkheim のモデルの機能主義者の宗教に対する説明は、宗教が実際には、宗教に、そして神と信仰に関するものでもないことを明らかにする。すなわち、それは、何かしら別のこと、つまり、社会秩序を支えているものに関することなのである。おそらくは、機能主義に対する機能主義者の議論の適用は、機能主義が、実際には、科学と知識に関するものではなく、何かしら別なこと、すなわち、社会学者たちのあいだの社会的な結束を支えていることを示すことだろう。したがって、その適用そのものにおいて、その議論は、効果的に、それ自身の有効性を否定することだろう。

それら、相互反映性によって、このところ引き起こされた見解では、一般的に、社会学的な取り組みが、単純に、この原則を適用する余裕がないという事実がある。それは、それらの特徴そのものの土台を掘り崩すことになるからである。唯一の可能性は、社会学的な知識が不可能なことを公然と認めてしまうことである。なぜなら、相互反映性の原則では、すべての社会学的な立場が、自己破壊ということになり、適切な自己反映的な態度は、この避けがたい事実を含むことになるだろ

う。

相互反映性は、すべての社会学的な見解に自己破壊の傾向を明らかにすることだろう。そして一方では、それは、エスノメソドロジー自体も相互反映性の例外ではない。したがって、それ自体も、弱体化されるという事実を、表面化させている。

悲しいことに、エスノメソドロジーも、専門家の社会学者に異議を申し立てるための相互反映性の潜在的な価値を理解している人々には、期待外れである。それというのも、エスノメソドロジーが、その方向に全力で展開していこうとはしてはいないと思われなければならないからである。とはいえ、すでに提示したように、エスノメソドロジーのそのような概念に帰するには、躊躇する理由がある。Garfinkel は、彼の最初の解説である「What is Ethnomethodology? (Garfinkel 1967)」において、相互反映性の世界に、傑出した位置づけを与えた。だが、彼はたちまち、たとえ彼自身でさえ、その用語を、他の学者たちが現在使っているような仕方では使わなかったという事実を後悔するようになった。

Garfinkel と相互反映性

Garfinkel が「相互反映性」という言葉を使ったのは、たとえば、陪審員たちが、陪審員の部屋にいたとき、陪審員の仕事の一部として、また陪審員たちがその組織化を介して、実践的な社会学による理由付けを行う方法に関わっている行為そのものに埋め込まれた、実践的な社会学による理由付けの方法に注意を向けるためである。実践的な社会学による理由付けは、行為の抽象化から行われるものではない。それらの行為の真っ只中で、それに必須な一部として行われる。したがって、そのような理由付けについて検討することは、ふたつの道を切り開く。それは、どのように、

実践的な社会学による理由付けが、行為を組織化し、実行するかを考察するものである。またそれは、理由付けそのものが、そこに含まれている活動の組織によって形づくられる方法について考察するものである。

結果として、そのような実践的な社会学による理由付けの実質は、個々の行為によって、さまざまに異なるものとなる。ソフトウェアの技術者たちの集団が、ソフトウェアに関する理由付けのために、ソフトウェアの設計プロジェクトの進捗について見直すミーティングを開く一方で、陪審員たちのあいだで、理由付けされることは、被告人が有罪か無罪か、ということである。社会学と、エスノメソドロジーに関しても、理由付けされることは、「社会秩序」である。だが、私たちが見てきたように、この問題に対する専門用語が着想されたのは、非常に異なっている。エスノメソドロジーが、その研究を行うために、それもまた実践的な社会学による理由付けを採用していることという事実を受け入れることには、それによって、それが調査したがっている現象の別な種類の例証を提供できるためには、戸惑いも自己破壊も存在しない。もちろん、エスノメソドロジーによる理由付けそのものが、エスノメソドロジーそれ自体の行為や、これらの行為の組織化に、埋め込まれた、組織化されたものに対して相互反映的なのである。

適合するように、物理学と水脈占いに同時に言及したことは、関係のある意味あいを持つものではないが、それというのも、この論点が主張されたのは、認識論的なものではない。たとえば、これらの行為の利点が、真理を支える物だということに関してではないからである。それは、単純に、方法的なものであり、たとえば、これらのそれぞ

れの行為の組織化が見られる可能性がある方法に関するものなのである。それぞれの行為が、その実践的な社会学による理由付けの方法を持っている。しかも、それぞれが、いかなる社会的な行為とも同様に、社会学（とエスノメソドロジー）それ自体も含めて、その日常的な事柄を組織するための、そのような理由付けの利用という観点から、検討される対象なのである。同時に、注目されなければならないことは、物理学も水脈占いも、どちらも、実践的な社会学による理由付けを含んでおり、そのような理由付けがなされる実質や、そのような理由付けが直面する問題や、そのような理由付けが組織される方法は、多くの重要な点で、理由付けが構成要素となっている行為とは、示差的なものなのである。ここでは、物理学と水脈占いの違いを取り除く傾向もなければ、それ自体の価値に関するいかなる判断も述べる傾向もない。そのような判断がエスノメソドロジーに関係するのは、それらが、個々の行為の実践的な社会学による理由付けの一部になる限りにおいてである。ことによると、水脈占い師は、不当な扱いを受けていると感じているかもしれない。なぜなら、その仕事が、物理学者の仕事と比較して、怪しげで、誤ったものと見なされているからである。物理学者は、高い評価を受けるものと見なされ、水脈占い師たちは、なぜ自分たち自身がそのような地位を否定されるのか理解できないにも関わらず、そうなのである。エスノメソドロジーは、単純に、水脈占いが、物理学と同じく立派なものだと述べるものでもなければ、物理学は、水脈占いと同じ程度のものであるに過ぎないと述べるものではない。それというのも、エスノメソドロジーの関心は、行為の組織化にあり、そのような判断は不適切なもので、それができる唯一のコメントは、単純に「ノー・コメント」なのである。

小さな全体像と大きな全体像（再び）

社会学を、相対主義と自己の脱構築（第10章参照）に向けて、根本的に改革したいと思う人々は、エスノメソドロロジーに失望することが判明した。それは、適切に、相対主義と相互反映性を開拓したものと思われる。だが、それは、その開拓の動きをさらに発展させることに失敗した。もっと悪いことには、これらの属性が誤っているように思われることである。たとえば、エスノメソドロロジーは、相対主義者でもなければ、（ここで求められている反省的という意味では）相互反映的でもない。とはいえ、それが、そちら側の失望であるとしたら、それは、社会学的な理論の「古典的な伝統」を続けたい人々にも、失望であったのである。その失望は、しばしば、批判として表現される。

エスノメソドロロジーに対する批判的な見解

エスノメソドロロジーは、対面的な関係の研究だけを含んでいて、複雑な社会システムについては、なんら語らない。だが、それこそが、MarxやDurkheimやWeberの古典的な伝統の主要なトピックだった。それは、たんにエスノメソドロロジーが、それらの事柄に対して、口をつぐんでいるということではない。以下のように誤解されている。むしろ、口をつぐんでいることが（伝えられるところによると）、そのような構造が存在することの否定だとされている。エスノメソドロロジーは包括的な社会学になろうとしているとされている。唯一の社会的リアリティは、単なる専門家の部門ではなく、個人のあいだの対面的な相互行為にあると（批評家に言わせると、誤って）想定しているとされている。だがこうした見解は、エスノメソドロロジー研究者によって研究されている対面的な相互行為に、その時々を状況を提供し

ているリアルな現象の存在を否定する。

たとえば、エスノメソドロロジーには、なぜソフトウェア技術のビジネスが西洋世界で発展し、なぜコンピューター化がビジネスや他の領域で、非常に早く広範に受け入れられたかを説明することはできない。したがって、それは、そもそも、上記で言及したソフトウェアの技術者たちが、なぜ、どのように、それについて話すための技術者のミーティングのために集まるのかを説明することはできない。全面的な完全に包括的な社会学であることよりも、むしろ、最高のエスノメソドロロジーは、社会学におけるひとつの専門分野であることを（その議論は続いているが）望んでいる。それは、小規模の社会学的な現象と対面的な状況に焦点を当てるものである。そのような多くの批評家たちにとっての論理は以下のようなものである。すなわち社会学的な思考には、統合の必要があり、それによって、その顕著な競争相手の理論的な取り組みを、エスノメソドロロジーが実際に補完するという地位が見出されるというものである（統合に関する思想家たちの議論については、第13章を参照）。

とはいえ、エスノメソドロロジーが研究している状況を、対面的な状況として語ることは、いくぶんか誤った名称である。ついでに提案されることは、それらが、より大規模な社会的環境に対して、目を閉ざしているということも誤っている。実は、より大規模な社会的環境とされているものの性格は、しばしば、その方法の多様性の点で、状況に即した行為に従事している人々の実践的な社会学による理由付けに基づいていることは、明らかである。

エスノメソドロジーの研究者たちの見解

この社会的な環境を、その場の人たち（そして、それに参加する社会学的な調査者）の目に見えるものとするのは、対面的な状況を介してのことなのである。確かに、「可視性のアレンジ」という表現は、対面的な状況の、ある側面を同定するために作られた言葉である。このアレンジは、参与者たちが、状況づけられ、行為し、彼ら自身が組織する、より大規模な社会的な複合体の適切な関連性と組織化を、参与者たちに示すことに役立つ。

最終的にいうと、批評家たちには、より広い社会構造に対する意図的な無視として見えているものは、エスノメソドロジーの研究者たち自身にとっては、原則に基づいた理論的な決断の産物なのである。社会的な行為の文脈を、彼らが研究している人々によって、そのように指向されたものとして扱うことなのである。エスノメソドロジーの研究者たちが、繰り返し、説明してきたことは、現場でのローカルな場面の中で行われるものとしての社会秩序に対する彼らの取り扱いと、彼らが自らに課した否定、たとえば、その現場のローカルな場面の外界の事実、たとえば、個性や、規範や、社会構造に訴えることによって、社会秩序の問題を解決することを断る点で、彼らが理解しているものとしての学問領域とのあいだのつながりである。それにもかかわらず、より広い文脈を無視しているという非難は、消えようとしなない。とはいえ、エスノメソドロジーの研究者たちにとっては、その非難は、いかなる重みも持つものではない。それというのも、その非難は、理論的なレベルで、エスノメソドロジーの仮定と他の取り組みの仮定の違いを認識することを拒否しているにすぎないからである。それは、結局は、エスノメ

ソドロジーが、より伝統的な社会学ではないことを批判していることになる。それというのも、エスノメソドロジーにとっては、日常生活というキャンパスに基づくことができる、この絵の画家のつもりの人々による日常生活という常識的な世界の外側に、その立場があるわけではない以上、単純に、持つべき大きな全体像など存在しないからである。社会学者による大きな全体像は、外側から構築されることを主張しているが、Schutzに関する私たちの議論は、エスノメソドロジーが、この仮定に対して、なんら交渉を持たないことを、明らかにするはずのものだった。

結論

エスノメソドロジーは、アングロサクソン系のアメリカ人の社会学において、それ自体を確立してきた社会学的な正統性の安定性を損なうことにたいして、最も批判的な貢献をした営みのひとつとして認められている。また、この点を非難されてもいる。それは、いかなる種類の「客観的な社会的なりアリティにたいする理解の可能性にも、結果として、いかなる壮大な理論に対する社会学的な夢に対しても、直接に異議申し立てを提示するものと受け取られている。エスノメソドロジーは、シンボリック相互作用論と同様に、社会学においては、過小評価されてきている。それが最も大々的に繁榮し続けているのは、会話分析である。それは研究の活気がある領域である。だが、しばしば、会話分析に従事する人々は、社会学よりもむしろ、言語学者たちとつながりを持っている。過小評価されているとはいえ、それにもかかわらず、エスノメソドロジーは、物議を醸し続けている。少なくとも、非常に一般に、言及されるものとなり、社会学におけるポスト構造主義者やポストモダンな考え方の先駆者として賞賛されて

いる。あるいは、社会学的な理論において、特に混乱させる役割を演じたものとして糾弾されている。この後者の点では、社会学的な理論の「統合主義者（*Perspectives in Sociology* の第13章参

照）が、いまでは、調整する試みをせざるを得ず、エスノメソドロジーの省察の一部を理論的な混合に組み入れざるを得なくなっていることが対立をきわだたせている。

おわりに

人々がお互いに観察しあうことによって社会が成り立っている。すなわち、私たちの観察は、社会的な行為の前提となっているのである。さらに腑分けするならば、ここで言う観察は、特定の概念とやり方にしたがって、見ることと聞くこと、さらに、それを記述し、固定することによって成り立っている。社会的な行為と、その観察は、人々が実際の観察や記述に用いている概念と、それを組織して、一目でそれと分かる「説明可能性」を産み出す方法によって可能になっているのである。

観察と行為の循環は、ある種のメタファーとして容易に理解することができる。だが、それは、状況に埋め込まれて、状況から切り離すことが出来ないものとして存在している。実際の状況において、見ているのは網膜ではないし、聞いているのは鼓膜ではない、また理解しているのは脳ではない。網膜や脳といった臓器は、他の器官と切り離されては機能しない。さらに言うならば、観察社会学の分析の単位は、具体的な文脈や状況そして、社会制度に埋め込まれている。それは、人々の活動と切り離された研究者の「主観」ではない。お互いが概念によって観察をすること、記述を行ない、行為を接続し、社会制度を生きることで織り上げられている相互主観性である。これは、なぜ、人々の実践に学ぶ、エスノメソドロジー研究という営みが可能なのかということと関わってくる。もともと、C.クーリーが「鏡に映る自己」というように、またA.シュッツが「相互に波長を合わせる関係」(西原2006)というように、人々の振る舞いは協調しており、ひとが「人の振りみて我が振りなおす」というのは、社会秩序の根本である。社会は、そうした相互の観察によって成り立っており、そうした相互の観察を可能にしているのが、説明可能性(=記述可能性)、すなわ

ち「見て分かる、聞いて分かる」ということである。この側面を強調するために、エスノメソドロジー研究を、観察社会学と呼び直すこともできる。それは、この部分をさらに推し進め、分析の単位を個人の「主観」ではなく「相互主観性」、あるいは、お互いに理解を調達しあって生み出されている「状況」、そこで行われている「活動」、さらには、社会制度において、「主観」を扱う場合でも、それは「相互行為」に埋め込まれたという限定のついた「主観」なのである。

既に確認したように、エスノメソドロジー研究の相互反映性とは、行為の記述や理由づけが、行為を組織し、また逆に、そうした記述や理由づけ自体が、そこに含まれている行為の組織化によって形づくられることである。このような(経験的な)「相互反映性」を研究するというプログラムは、観察に基づいて、人々が「気にもかけない」概念の組織化を明確化するということでもある。それぞれの現場で、行為が、理にかなっており、見て做うことができ、一目でそれとして可視的であるように組織化され、シークエンスとして結びつけられて行くという意味での「相互反映性2」の存在は、「説明可能性」と呼ばれ、まさに、「ルールに従う」という事、そのものである。そのプログラムにおいては、社会制度と呼ぶのが相応しい、安定した秩序が自己・組織されて行く姿を「見落とさない」で観察し、明確化することが課題となる。そのさいに、社会制度や相互行為の組織化において、さまざまな概念が、その理解のリソースになっている。エスノメソドロジーの研究対象は、様々な概念、そして理解に支えられ、人々が「気がつかない」し「気にもかけない」自然な相互反映性が紡ぐ、相互主観性の網の目であり、その研究の目的は、現場で実際に用いられるリソースを明確化、すなわち、再特定化することで

ある。『Perspectives in Sociology』を通読すると、エスノメソドロジー研究が、人々が相互主観性という網の目を紡ぐために実際に用いているが「気がつかない」そして「気にもかけない」方法と、そこで実際に使われている概念を観察し、記述する社会学であることが読み取れる。その意味で、エスノメソドロジー研究は、観察社会学であり、もうひとつの<概念分析の社会学>なのである。

文献：

- Cuff, E. C. & G. C. F. Payne (eds.) 1979 Perspectives in Sociology. Gerge Allen & Unwin.
Cuff, E. C. & G. C. F. Payne (eds.) 1984 Perspectives in Sociology. 2nd Edition. Gerge Allen & Unwin.
Cuff, E. C., Sharrock, W. & Francis, D. 1990 Perspec-

- tives in Sociology, 3rd Edition. Routledge.
Cuff, E. C., Sharrock, W. & Francis, D. 1998 Perspectives in Sociology, 4TH Edition. Routledge.
西原和久, 2006, 「現象学的社会学」新睦人(編)『新しい社会学のあゆみ』有斐閣
山田富秋・好井裕明(編)1998『エスノメソドロジーの想像力』せりか書房
好井裕明, 2006, 「エスノメソドロジー」新睦人(編)『新しい社会学のあゆみ』有斐閣
好井裕明(編), 1992, 『エスノメソドロジーの現実』世界思想社

謝辞：本論文の執筆にあたり、本学文学研究科の岩村計子氏にご協力をいただいた。また、畏友、宇佐見信夫氏にも、ご協力いただいた。お二人に感謝したい。